

2013 年度 第 27 回
松山大学経済学部ゼミナール大会
報告要旨集

2013 年 11 月 30 日 (土)

松山大学経済学部

目 次

経済学部学部長挨拶	5
【第1部会】	
赤木ゼミ A 班 「地域活性化にむけた取り組み:愛媛県各地の事例から」	6
井上ゼミ C 班 「ゆるキャラの経済効果」	7
松浦ゼミ A 班 「ゆるきゃらによる地域活性化」	8
鈴木ゼミ B-1 班 「変化する商店街の実態を捉える」	9
櫻本ゼミ 「愛媛県産業及び総合的商品の研究」	10
【第2部会】	
井上ゼミ B 班 「愛媛県の各地域における地域活性化について」	11
赤木ゼミ B 班 「松山市の特殊な地域発展のカタチ:他都市との比較を中心に」	12
久保ゼミ C 班 「愛媛県南予地方(愛南町・内子町)の地域活性化の取り組み・提案」	13
川東ゼミ B 班 「日本の偉人・愛媛の偉人について」	14
間宮ゼミ A 班 「四国の観光客増加による経済波及効果の研究」	15
【第3部会】	
川東ゼミ A 班 「現代日本の政治経済の焦点沖縄問題と TPP 問題」	16
間宮ゼミ B 班 「TPP による愛媛県経済への影響」	17
道下ゼミ B 班 「日本の TPP 参加」	18
溝渕ゼミ A 班 「少子化問題を考える」	19
宮本ゼミ A 班 「社会保障と税の一体改革について(特に年金問題について)」	20
柳原ゼミ A 班 「医療扶助制度の問題点と解決策」	21
【第4部会】	
熊谷ゼミ C 班 「スポーツ心理」	22
松浦ゼミ B 班 「オリンピックによる経済効果」	23
張 ゼミ A 班 「国体の開催地への波及効果—2017 年の愛媛大会を中心に—」	24
入江ゼミ B 班 「エコカーの将来」	25
宮本ゼミ B 班 「クールジャパン戦略で、日本の収益を増やすことができる。」	26

【第5部会】

馬 ゼミ A 班	「日本の収入格差について」	27
久保ゼミ B 班	「未曾有の危機におけるまちづくり」	28
井上ゼミ A 班	「経済危機」	29
光藤ゼミ	「ネット販売及び、文書・映像のデジタル化がもたらすビジネス 変革を考える」	30
道下ゼミ D 班	「違法ダウンロード」	31
入江ゼミ C 班	「原子力発電の問題点」	32

【第6部会】

馬 ゼミ C 班	「社会に出て生きる大学時代の過ごし方・勉強法」	33
熊谷ゼミ B 班	「音楽選好と心理状態の関連」	34
道下ゼミ C 班	「家電 ～掃除機の比較～」	35
柳原ゼミ B 班	「生活保護の不正受給を減らすにはどのような対策が適切か」	36
安田ゼミ C 班	「 “タダ”より高いものはない～無料サイトはどのように利益を 得ているのか?～ 」	37

【第7部会】

鈴木ゼミ C 班	「三崎半島の柑橘農業について」	38
道下ゼミ A 班	「食品産業」	39
松井ゼミ	「里地里山における自然環境と経済活動」	41
渡辺ゼミ	「和食の歴史」	42
入江ゼミ A 班	「再生可能エネルギーについて」	43
張 ゼミ B 班	「再生可能エネルギー導入の促進と課題」	44

【第8部会】

松浦ゼミ C 班	「東京ディズニーランドの経営戦略」	45
熊谷ゼミ A 班	「テーマパーク 東京ディズニーランドの仮説・証明」	46
溝渕ゼミ B 班	「旅行経済学について」	47
宮本ゼミ D 班	「アベノミクスについて」	48
安田ゼミ B 班	「スマホとゲーム開発」	49
掛下ゼミ	「投資銀行と商業銀行」	50

【第9部会】

久保ゼミ E 班	「模型小売店の生き残り戦略」	51
宮本ゼミ C 班	「クロスメディア」	52
安田ゼミ A 班	「スマホアプリでのお金儲けの仕方」	53
間宮ゼミ C 班	「アベノミクスによる経済波及効果」	54
馬 ゼミ B 班	「世界の武器輸出と日本の武器輸出のあり方を考える」	55

【第10部会】

清野ゼミ	「国際経済：日本と東アジア」	56
溝渕ゼミ D 班	「恋愛経済学」	58
安田ゼミ D 班	「SNS の進化」	59

第 27 回松山大学経済学部ゼミナール大会報告要旨集によせて

経済学部長 間宮賢一

経済学部ではゼミナールでの学習・研究活動を活性化する目的で、1987年よりゼミナール大会を開催しています。今回で27回目を数えます。学部行事としてのゼミナール大会には原則すべてのゼミが参加することになっており、本大会には、22ゼミ56班、400名以上の参加がありました。

大会では9つの部会と1つの討論会に分かれて、ゼミナールでの研究報告及び討論を行っていただきました。テーマは、エネルギー問題、情報化に関わる問題、地域経済の活性化、TPP参加問題や観光と経済の関わりなど多岐にわたりました。本大会でも各部会の参加者にお互いに評価し合ってもらい、各部会で最優秀ゼミあるいは班を1つ、優秀を2つ表彰することにしました。

ゼミナール大会参加者に大会についてのアンケートに答えてもらいました。全体としてゼミナール大会が満足できたと回答した学生は昨年に比べ7%も上昇し36.9%、おおむね満足できた学生は40.2%でした。この結果は、ゼミナール大会に真面目に取り組んだ学生が、半数以上の59.4%であったことによると思います。ほぼまじめに取り組んだ学生26.8%と合わせると9割近い学生が真面目にゼミナール大会に臨んだということになります。その結果、スキル・アップにつながったという学生が78.3%（つながったと思う38.8%、ある程度つながったと思う39.5%）、就職に役立つと答えた学生が67.4%（役立つと思う30.8%、ある程度役立つように思う36.6%）となっています。このように、評価できる点がある半面、反省しなければならない点もあります。ゼミナール大会に向けての準備段階で、ゼミや班の中で負担の偏りがあったと答えた学生が7割（偏りがあったと思う36.3%、ある程度あったと思う34.1%）を超えていました。昨年に比べて10%もその比率が高まっています。全員の主体的参加という状況とは程遠いのが現状です。なお、大会当日はいくつかのゼミで2回生も聴衆として参加してくれました。2回生の86.2%が3回生の取り組みが十分であったと評価し、ゼミナール大会に出席して、知識が増えたり、興味・関心が高まったりしたとの回答は87.7%でした。

以上のように、学生自身による評価は肯定的なものでありましたが、満足できる水準にまで達したとはまだまだ言えません。3回生は就職活動や卒業論文執筆に向けて、引き続き研究水準やプレゼンテーション能力の向上に努めてほしいと思います。2回生は日常的に現実に向け、しっかり学習を積み重ね、次回ゼミナール大会で充実した研究報告あるいは討論が行えるよう頑張ってもらいたいと思います。

1 発表論文の趣旨

現在、各地域において地域活性化の取り組みがおこなわれている。そのなかでも、従来伝統的・文化的催事とされていた祭りが、近年、地域活性化政策として注目を集めている。これをうけて、赤木ゼミ A 班は、経済効果と定着効果をもたらす地域活性化政策としての祭りに着目した。その中でも四国の比較的大規模の祭りを取り上げて、それぞれの地域活性化のありかたについて調べた。

第 1 章では、経済効果をもたらす祭りとして高知のよさこい祭りを取り上げた。よさこい祭りが 70 億円以上の経済効果をもたらす祭りであること、また、祭りの日の高知インターチェンジでの観光バスの出入り台数などを統計に出して、来客によって経済効果をもたらしていることを論じた。

第 2・3 章では、定着効果をもたらす祭りとして新居浜祭りと西条祭りを取り上げた。我々はそれぞれの祭りに参加し、県外に進学・就職している参加者にアンケートを実施した。その結果として、これらの祭りは地元への帰属心を高め、定着効果をもたらしていることを論じた。

2 部会・学科会での討論内容

当日は、会場内での質問はでなかったが、事前の質問状ではいくつかの質問があった。特に「四国三大祭りの残りの一つである「阿波踊り」を調査対象にしなかった理由は？」という質問については、阿波踊りは地域活性化という視点から見た場合、よさこい祭りと同じ経済効果をもたらす祭りと考えられるため、対象から外したことを説明した。

3 ゼミナール大会で学んだこと

このゼミナール大会にむけて前期の授業から取り組んできたが、最初は計画通りには行かず明確なビジョンも見えていなかった。夏季休暇中から本格的に取り組むはじめて徐々に論文の内容も固まってきた。それからは班の中でもグループを分けて、各章で論じることを入念に調べた。それぞれ役割を決めて活動したことは、効率がよかったと思う。ただ、1 つにまとめる時には論点が違っていたり、少し苦労した面もあった。プレゼンでは何回も練習してその度に修正し、本番ではまずまずのプレゼンが出来たと思う。

この一連の活動を通して役割を分担して作業することは良いことだが、定期的に見せ合って確認することが必要だと感じた。

1. 報告の要旨

ゆるキャラと経済効果の説明。5体のゆるキャラの経済効果が各地域に与える影響の調査内容の報告。また、現在ゆるキャラが抱えている問題やその解決策の提唱。

2. 部会での質疑応答

Q. ふなっしーは1回目の公認でなぜ公認にならなかったのか？

A. ゆるキャラとは本来住民の声をもとに作成されるものだが、ふなっしーは一個人によって製作されたため公認にはならない。

Q. P5の4行目の「私たちは、粗悪品が乱造されたとしても～地域活性化には繋がるはずだと考える」とあるが、なぜそう考えるのか？

A. 粗悪品が乱造されてもそのゆるキャラの知名度は多少なりとも高まるため地域活性化につながると私たちは考えた。

Q. P9の彦根市納税・件数、金額のグラフで、その他の寄付件数・ひこにゃん応援事業件数とその他の寄付金額・ひこにゃん応援事業金額が共に平成25年度に急激に落ち込んでいるのはなぜなのか？

A. 論文内に記述していると思うが、平成25年は3月～6月の4か月間のデータなので寄付件数・寄付金額が少なくなっている。

など9個の質問を受けた。

3. ゼミナール大会で学んだこと

まず論文作成までの段階においては、リーダー（班長）という役割の重要性を感じた。ゼミ大会のようなフリーライダーを生みやすい活動においてリーダーがしっかりと機能しないと一人一人にかかる負担に大きな偏りが生まれる。結果効率が悪くなり、出来の悪い論文となる。

次に発表当日においては、発表での話し方を学んだ。赤木ゼミの発表はただ論文の内容を報告するのではなく、所々話の腰を折り、雑談を織り交ぜていた。論文の内容を報告するだけでは単調な話し方となり、よほど内容が素晴らしい出来でない限り15分間聴く側の興味を惹きつけ続けることは難しい。雑談を織り交ぜることでアクセントとなり、興味を惹きつづけることが可能となる。

1. 報告の要旨

私たちは「ゆるキャラの地域活性化」について報告しました。「バリィさんとくまモンは同じグランプリを獲得したはずなのに、バリィさんがくまモンのようになれないのは何故なのか」に視点を置きました。調査の中で一番の決め手となったのは、「キャラクターの管理方法」でした。キャラクターの使用料がくまモンは無料、バリィさんは有料だと知り、その部分が経済効果や事業展開の差に影響していました。また、過去のランキングからキャラクターの支持されやすい要素を研究し、大体上位を占めていたのは、「動物系かつ名前がシンプルで覚えやすいもの」が多かったです。関心を持たせるために、メディア・SNS 等を使った広報 PR や大企業とのコラボ展開といった戦略も行われていました。全体を通して、利益面からみると使用料が無料な分、企業等からのアプローチも受けやすく、幅広く PR 活動を行うことができますが、有料になると制限が出てしまい、PR 効果が薄まります。しかし、どのゆるキャラにも独自の良さがあり、小規模の活動を通して徐々にファンが増え、支持され続けるのではないかと私たちの班は考えました。

2. 部会での討論内容

当日の質問はありませんでした。前もって届いていた質問は、「ゆるキャラのさらなる可能性についてどう思うか、自分たちが考える課題はバリィさん以外の使用料を徴収しているキャラクターにもいえるのか」の 2 問でした。

3. ゼミ大会で学んだこと

「皆で何か 1 つのことをやりとげる」ということが、こんなにも大変なことだとは思っていませんでした。私たちの班は 6 人で行いましたが、「分担すればすぐ終わりそう…」と甘く考えていました。実際作業を行えば、スケジュールの合う日にちが少ない中での作業は物凄く大変で、その作業過程でも噛み合わない部分が出てきて、各自の作業と今後の作業を調整するのに悩む日々もありました。私自身、初めて代表を務めたこともあり、うまく班員をまとめて、的確な指示が出せていたのか非常に不安でした。指示する側の大変さも身に染みて分かりました。ですが、一番は「どうしたら自分たちの報告内容が分かりやすく伝わるか」と相手の立場になって物事を考えることの大切さを学びました。論文にしても、パワーポイントにしても、図や表・色の使い分け・まとめ方など、聴き手も関心を持ってくれるようにゼミの担当教員からアドバイスを頂いたり、自分たちでも考えて工夫を施しました。誰一人文句も言わずに作業をこなしてくれたので、チームワークも良かったです。大変でしたが、協調性やコミュニケーションの向上など得るものも多かったので、参加してよかったと思います。

「変化する商店街の実態を捉える」

鈴木ゼミ B-1 班

1. 報告の要旨

内子町の観光調査を行いその内容を報告した。調査場所として内子町を選んだ理由は、内子町は愛媛県内のまちづくりでは最も先進的だと考えたからである。住民主体で積極的に活動し、町並保存や村並保存だけでなく道の駅「からり」の整備など多方面にわたるまちづくりを行っている。そこで私たちは、内子町の観光地としての現状・課題を把握するため現地でアンケート調査を実施した。8年前に鈴木ゼミが行っていたものと同じ設問を用い、比較した。また、今年の4月にオープンしたビジターセンター・町の駅「NANZE」についても調査を行った。

2. 質疑応答の内容

観光客が内子町に宿泊しない多くの理由は「その他」であり、宿泊施設の認知度が課題であるとは言えない。なぜそのような考察に至ったのか「、その他」の回答を例に挙げて論じてほしい、とあった。この質問に対して私たちはその他の回答の多くは「日帰り」や「地元の住民だから」という理由がほとんどで、これらを例外とすると宿泊施設の認知度を高めることにより多くの観光客の獲得に繋がり、観光地としてさらに発展するのではないかと考察に至ったと回答した。

3. ゼミナール大会で学んだこと

同じ教室で発表を行った6班のうち、私たちを含めて5班が地域活性化に繋がる研究報告だった。ゆるキャラの経済効果による地域活性化や祭りによって人が集まることによる効果などの研究があった。なかでも、地域活性化策としての祭りとして、愛媛県東予地区の祭りとは高知県のよさこいを比較していた赤木ゼミA班の発表の内容は興味深かった。地域活性化において祭りには経済効果・集客効果・評判効果・定住効果の4つの効果が期待されるようだ。よさこいは県外から多くの人が集まることによって経済効果が得られ、愛媛県の東予地方の祭りの主体は主に地元の人で、定住効果が期待できる。東予地方の生まれの人の中には祭りのために仕事を休んで帰郷する人もいるようだ。ゆるキャラや祭りでの地域活性化の発表を聞いて、地域活性化といっても様々な活性化の方法があることに気づくことができた。

今回のゼミ大会で改めて今までの活動の意義や成果を見出すことができた。思い通りにいかないこともたくさんあったが、私たちの手で集めたデータが一つの結果を生み出し、現状や変化を比較して新たな課題を発見することができ、充実感を感じている。同じゼミの仲間や協力していただいた内子町役場の方々のおかげだと思う。また、限られた時間だったので全員が集まって話し合う時間が十分確保できず、負担の偏りも多少あったかもしれないが、班の全員が力を出し合ってゼミ大会を迎えられたと思う。グループで一つの物を作り上げていくことで、グループ内での自分の役割を理解して行動することを経験することができた。ゼミ大会やこれまでの活動を通じて得た知識や経験は社会になっても役立つことだろう。企業内での自分の立ち位置を理解し、自分がすべきことを考えて行動できるようになるための良い経験となった。

1 報告の要旨

松山大学 90 周年記念企画の一つとして、「松山広め隊」が結成された。これは愛媛県特産物を県外で販売し、特産物を PR するものである。これに伴い、櫻本ゼミでは松山広め隊イベントのために準備を行った。県外の方からの特産物に対する反応を調べ、現在の特産物はどのように販売すれば、より知名度を上げることができるのか、どのような特産物であれば愛媛をさらに広げることができるかを、現地による実地経験から研究した。愛媛県特産物として、様々なジャンルを含めた 12 種類準備し、比較できるようにした。仕入れや販売など、一貫の作業は櫻本ゼミ生が主体で行うため、伊予絃会館や砥部焼センターなどに直接出向き、商品に対する知識を十分につけ販売活動に臨んだ。愛媛の特産物を研究するに当たり、愛媛の産業を捉え産業特色を調査し、特産物が生まれるに至った背景などの調査も行った。松山広め隊の活動は、愛媛の伝統的で価値のある文化を保存・発展させることにも繋がり、愛媛に貢献することができる活動となっている。なお、広告代理店である株式会社大広の成松さんと、同じく広告代理店である SHIPSS の阿部さんに協力をしていただいた。

2 部会での討論内容

愛媛県にはさまざまな産業が取り巻いており、今治タオルや造船を代表する東予では第二次産業が盛んであり、観光業など有名な松山市を中心とする中予では第三次産業が盛んである。また、漁業や農業が有名な南予地区ではやはり第一次産業がもっとも盛んになっている。これらの産業が生み出した愛媛県特産物は、現在愛媛県産業をより発展させることに役立ち、同時にその特産物もブランド化する事例も起きている。その 1 つに今治タオルがある。今治タオルは、タオル業界でブランド価値を与えられ、このブランド価値によって今治がさらに発展している。今治を発展させている別の要因に、ゆるキャラのバリィさんの存在もある。知名度の高さは今治タオルよりも高く、年齢層を問わず好感を持てるキャラクター設定になっている。このバリィさんのように意味的有用性が高い商品が愛媛県特産物には多い。砥部焼も、意味的有用性が高いと言ってよい商品である。砥部焼の柄にこだわりをもつ消費者は多く、また砥部焼が割れにくいという製品の具体的部分もあり、結果消費者の効用は価格が高くても満たされるものになっている。

愛媛県特産物が今後も廃れることなく愛媛を全国に PR してくれるという特徴を持っていることになる。以上が、特産物販売の実地経験に基づき分かったことであり、この活動が有意義であったことが確認された。

3 ゼミナール大会で学んだこと

ゼミ大会を通して今までバラバラだったゼミの雰囲気はまとまったように感じます。一人だけが頑張るのではなく、各自役割を決めて取り組む姿勢がとても重要だと思います。これから先ゼミのメンバーで一つの活動をすることは少ないと思いますが、ゼミ大会で得た絆を武器にこれからも協力していきたいと考えています。

1. 報告の要旨

近年、ゆるキャラグランプリやB-1 グランプリが盛んに行われている。そこで上位に入賞すると有名になるが、その他の県や市ではどのように地域活性化を行っているか疑問に感じた。そこで身近な愛媛県内での地域活性化策を調べた。

まず前提として、近年では地域内の人が、自ら行う内発的発展論が主流である。

それでは県内の地域の取り組みを紹介していく。

今治市では、ものづくりと海事産業をキーワードに地域活性化を行っている。具体的な取り組みとして、今治タオルプロジェクトやバリシップがある。特徴としては、ものづくり産業や地域性を活かしている。しかし、どのようにものづくり産業を持続的に発展させるかという課題がある。その解決策として、若者を教育していく構図を作り上げることが必要だと考える。

松山市では、たからみがきをスローガンに地域活性化を行っている。具体的な取り組みとして、坂の上の雲のまちづくりや俳句甲子園の実施などがある。特徴としては、行政と市民が一体となって地域活性化を行っている。しかし、松山城や道後温泉につぐ資源がないという課題がある。その解決策として、身近なところから新たな宝を発掘していくべきだと考える。さらなる地域活性化のために必要なことを他県の事例を参考に考える。和歌山県田辺・南部地域のウメ産業では、六次産業化という幅広い産業の展開を行っている。ここから、地域全体を巻き込んで、連携・協力することの大切さが分かった。徳島県上勝町では、つまものを利用した葉っぱビジネスを行っている。ここから、何気ないものにも気を配ることに地域活性化のヒントが隠されていることが分かった。その他にも流行していることを取り入れ、地域独自の色に改善することも必要である。最後に、地域活性化のための1つの案として商品貨幣を挙げる。様々な課題も生じるが、貨幣として利用する物の需要が高まるプラスの効果も期待できる。

2. 部会での質疑応答内容

松山市の地域活性化の事例である観光俳句ポストの設置は、どのようなかたちで地域活性化の促進をはかっているのか。観光面での集客によって地域活性化を図っている。今治市の事例より、「今治市は様々な分野の交流」とあるが、どういう分野との交流なのか。また、交流したことによって具体的にどのような成果がでたのか。観光と生活の交流を生み出した。そして、健康増進や観光客の増加という成果が出た。西条市の事例から、「さらなる販売ルートを拡大し、また多様な商品のブランド化にも努め」とあるが、具体的にどのような販売ルートで、どのような商品のブランド化に努めるのか。 レタスのブランド化にも努め、近い将来「未来都市モデルプロジェクト」のひとつである「沖縄物流拠点都市」と連携し、西条の農産物をアジア各国に販売していくことも視野に入れている。

3. ゼミナール大会で学んだこと

主に学んだことを2つ挙げていく。

1つ目は一人で課題を行っている時には、気づけないようなことがチームで行うと仲間から指摘してもらえ、気づけることである。具体的には論文の作成では、読み合わせによって自分の文章でのミス指摘してもらった。そのことによって、一人で書く場合と比べて完成度の高い論文になったと感じている。また、プレゼンテーションの作成にあたって、より見やすくするため、どうしたらよいか一番身近な観客としての意見をもらえた。そして、見やすさを重視したプレゼンテーションを作ることができた。2つ目はスムーズに話し合いを進めることの難しさである。様々な意見が出たということもあって課題を話し合うことに多くの時間を費やした。いべきところと譲歩するべきところのバランスを取って円滑に話を進めることの難しさを感じた。

(1) 報告論文の要旨

私たち赤木ゼミ B 班は、コンパクトシティの拡がりについて、日本と欧米諸国の都市政策の比較に焦点をあてて検討した。比較対象は近年、環境問題の改善を目標に掲げてコンパクトな街づくりに取り組んでいる欧米の 3 都市（フランスのストラスブール、ドイツのフライブルク、アメリカのポートランド）と日本の 2 都市（松山市と富山市）である。欧米の 3 都市と日本の 2 都市を比較してみると、両者のコンパクトシティ政策には、公共交通機関の整備という共通の政策がみられた。しかし、欧米では、罰則規定や政府からの補助金が削除されるなど法的・政治的強制力のもとで政策が推進されているのに対し、日本ではあくまで、市民の意識を高めることに主眼をおいて政策の推進を図っているため法的強制力はみられなかった。このことは、日本と欧米ではコンパクトシティ政策に対する政府の「介入」の違いを示すものである。

(2) 部会・分科会での討論内容

部会での発表は、パワーポイントを用いて行った。聴衆には、パワーポイントのスライドを印刷した資料として配布したが、報告中はスライドに集中してもらった。スライドは分かり易くなるよう、図表やアニメーションに工夫を凝らして、ある程度は満足いくものに仕上がっていたのではないかと思う。私たちの班の発表者は、原稿を一切使わず、パワーポイントの要点を指摘し、補足説明も行いながら、聴衆が退屈しない報告を行うことができたのではないかと思われる。質問状への回答は、発表中に回答したものと、発表後回答したもの合わせて、ほぼ全てに回答することができた。

(3) ゼミナール大会で学んだこと

今回のゼミナール大会で学んだことは、第三者に分かり易く伝えることの大切さである。自分たちで選択したとはいえ、「コンパクトシティ」というあまり馴染みのないテーマについて論じていくのは、大変難しく、最初のうちは全く内容の無い論文を書いていた。しかし、何度も修正を重ねた結果、ある程度は説得力のある論文になったと思う。グラフや資料など、確かなデータを作成し、分析することの大切さも学んだ。特に、法的・政治的強制力の有無が温室効果ガスの排出量削減という政策効果の違いを生み出すことを指摘するためグラフを作成したが、一部の都市で予想していた結果にはならなかったため、涙を吞んで削除した。常に第三者を意識し、分かり易いものを作ることが大切だと分かった。

1. 報告の要旨

南予地域の観光地は、内子町の伝統的な町並みのように、地域の人たちによって磨かれ、多くの観光客を集めているところもあるが、恵まれた自然と長い歴史、伝統に育まれた独自の文化を持ちながら、県外の人には観光地としてはあまり知られていないところも多いことが分かった。今後、南予地方の観光産業を発展するために、まずは中四国地域への広告宣伝が必須だ。他県の人々に「知って」もらわなければ何も始まらない。交通の速さや利便性なども重要視すべきだ。体験型観光のメニューの整備とともに、ガイドやインストラクターの育成が欠かせないだろう。

2. 部会での討論内容・質疑応答

● 南予の中でも、何故内子、大洲を研究しようと思ったのか？

内子を選んだ理由は、観光地が多数あり、観光地としての魅力を再発見しようと思ったため。大洲を選んだ理由は、内子が隣にあるにも関わらず全体的に観光としての意識が少し薄いのではないかと考えたから。

● 内子、大洲において観光客が増えているのか、減っているのか？

内子において観光客が増えている。

大洲において観光客が減っている。

● 昔、内子は評価されなかったのに、何故今評価されるようになったのか？

人々の伝統文化に対する関心が高まり、内子のような町並みや内子座などの文化財を持っている町は注目されてきたから。

● どうすれば内子座に観光客が集まると思うか？

まちなぎわいをつくり出すためには、市外からも大勢の人を呼ぶ込む必要がある。大勢の人に訪れてもらうには、まちの魅力を高めていかなければならない。観光資源の充実と同時に必要なのが、観光を支える基盤の整備である。観光案内機能の充実や観光人材の育成などを進めていくことが必要だと考えられる。

3. ゼミナール大会で学んだこと

どの班の発表も素晴らしく、わかりやすい内容ですぐ理解する事が出来た。その中で特に印象が強かった班は赤木先生の班であった。レジュメ中心ではなく、発表者中心にスライドの内容を紹介していた。原稿を読み上げることもなく、アドリブも少し交えながら発表していたので堂々としていてとても立派だった。プレゼンの仕方を見て学ぶことができた貴重なゼミナール大会だと思った。

1. 報告の要旨

日本の偉人・愛媛の偉人について調べ、今大会では渋沢栄一と新田長次郎について、両者の残した功績や共通点(特に教育面や思想)に重点を置き発表した。まず渋沢栄一氏は日本資本主義の父と呼ばれ、合本会社(今で言う株式会社)を日本に取り入れた。そして彼は一般に 500 社あまりの企業を設立したとも言われ、関連会社も含めれば 1500 社を上回るほどになる。しかし、彼みずから役員を務めたのは 50 社程度だと言われており、実際にはアドバイザーやマネージャーのような面が強かった。また教育面では女性教育に力を入れ、自らも日本女子大学の第三代理事長を勤めている。そして社会活動家としても知られ慈善事業も行った。次に新田長次郎氏は帯革業で成功し、大正初期には世界 3 大革ベルトメーカーと評価されるほどになる。教育面では明治 44 年、大阪で資材を投じ私立有隣尋常小学校(現大阪市立栄小学校)を造り、学校の費用全部を負担し、児童の就学に努めた。また第 5 代松山市長加藤恒忠の依頼で創設費 48 万円と経営費を寄付し、1923 (大正 12) 年 3 月 3 日、文部省の許可を受け専門学校令による松山高等商業学校(現松山大学)が松山市清水町(現文京町)に設立され、同年 4 月 25 日に開校した。また学校の設立は、社会貢献のためであったとした。以上のとおり、両者は実業家という面だけでなく、教育者という面で共通点があり、「公の利益」を重視している。

2. 部会での討論内容

部会では、間宮ゼミ A 班から「新田長次郎と渋沢栄一郎をしらべるに至ったいきさつはなにか。また渋沢栄一郎は現代にどのような影響を及ぼしているのか、また関係があるのか」という質問があり、その質問に対し「調べるいきさつは、すばらしい功績をあげた偉人であると名が上がるが、何をしたのか具体的には知らないことも多かった為、それを知るために調べ始めた。そして渋沢栄一は現代において、株式会社の基礎を築き、500 社あまりの企業の設立や、第一国立銀行の前身である三井小野組合銀行の設立に関わったことなどから現代資本主義の父と呼ばれたことがわかった。」と回答した。

3. ゼミナール大会で学んだこと

このゼミナール大会で学んだことは、まず渋沢栄一・新田長次郎の経営理念や思想から様々なことを学んだ。渋沢栄一氏は、社会全体の幸福を考えたとき、市民と国の両方が富むために合本会社(今で言う株式会社)が必要だとし、新田長次郎氏は、「優秀な製品を製造することによって事業が栄え、ひいては蓄財することになる。しかし、その金は社会に貢献するよう公共のために使われなければならない。」とした。両者は共に、個の利益の追求ではなく、社会のためになることを行わなければならないという考えを持っており、私たちがその考えをこれからの人生において持ち続けなければならないと感じた。また教育に関しても新田長次郎氏は「国にとって教育こそが 100 年後、最も大きな利益をもたらす」とし、教育の重要性をあらためて実感することができた。次に学んだことは大会に向けてのゼミでのチームワークの重要性である。一つのことを成し遂げるには、班のひとりひとりが協調性を持って取り組むことによって最終的に達成できる。このことは、将来いろいろな場面で役立つ経験であるといえるだろう。

「四国の観光客増加による経済波及効果の研究」

間宮ゼミ A 班

1. 報告の要旨

四国には、松山の道後、徳島の阿波踊り、高知のよさこい踊り、香川の讃岐うどんなど全国的に有名な観光資源が多くあるが、四国を訪れる観光客は全国と比較した際に、観光資源に見合った入込客数には達していない点、外国人観光客の少ないという点に着目し、観光が経済へと及ぼす影響が大きいことから、停滞する四国経済の成長には欠かせない産業であると考え、四国地区において観光客の増加が起こった場合、どの程度の経済波及効果が見込まれるのか、四国ツーリズム創造機構による観光客増加目標、産業連関表を利用し経済波及効果を算出した。結果として、90億円程度のGDPの増加が見込めるということから、観光産業の育成の必要を認識し、観光客囲い込みの手段としての、格安航空機として話題のLCC（ロー・コスト・キャリア）の誘致活動、広報手段としてSNSや動画共有サイトの利用を提案した。

2. 部会での質疑応答

「四国の観光客増加による経済波及効果の研究」ということだが、愛媛や松山でなく、なぜ四国を選択したのかという質問に対しては、産業連関表を作るにあたって、四国規模からのデータしかなかったためと答えた。

次に、落ち込んだ東北地域への旅行需要を伸ばすため開催した東北観光博を開催したとあるが、この博覧会を展開した結果はどうだったのかという質問に対し、「東北観光博」期間中の約13ヶ月における旅行者数及び経済効果は、①東北地域を訪れた延べ旅行者数は約4,970万人回、このうち観光目的の旅行者数は約2,570万人回、②東北地域を訪れた観光目的の旅行者数は前年同期と比べ約310万人回増加、③「東北観光博」が旅行のきっかけのひとつ、となった旅行者による経済波及効果は約840億円と推計される。次に四国の各県が観光客の取り合いをしないためにどうするべきかという質問に対し、四国は本州などからは離れているが、一度四国を訪れてもらえれば四国各県を巡ることは距離から考えるとそれほど難しいことでない、そこで四国各県を回るツアーを組めばよいと提案した。例えば四国八十八か所や各県の観光地、名産品を楽しむツアーを組むことである。

3. ゼミ大会で学んだこと

私たちはゼミナール大会で四国地域の観光の現状を調べ、観光が成長することによる経済波及効果を測定した。これを調べる過程で作業を分担したが始めのうちは、効率よく作業分担ができず時間がかかった。しかし研究が進んでくるにつれ各々の得意とするところがわかり、作業の分担ができ、効率よく論文のデータ作成をすることができるようになった。

そしてゼミ大会本番では、発表をする人がいかに重要か分かった。分かりやすかった班の発表者は、ゆっくり、ジェスチャーを使って、そして伝わりやすくしゃべろうとしており、ただ紙を読むのとは違って本当に聞き入ることができた。内容と同じぐらいプレゼン方法も重要である。以上のこと以外にも多くのことを学び、自分たちの研究に対する意欲を変えることができたゼミ大会は私たちにとって成功であったといえるだろう。

【1. 報告の要旨】 復帰以降なお沖縄県で一番の問題とされている米軍基地に焦点をあて、それを本土の人に聞いて貰うことで、沖縄の米軍問題に関心を抱いてもらい、少しでも沖縄の負担を知って貰おうと考え論文を作成。また実際米軍基地には問題点だけでなくメリットがあること、オスプレイを望む声があることなど、テレビでは知られざる沖縄の現状を知って貰う。私はその中で実際に米軍がもたらす経済効果とはどのような範囲なのか、どのような背景から現状に至っているのか調べ、その中身を簡単に紹介した。

【2. 内容】 私は米軍基地が沖縄にもたらすメリット・デメリットをテーマにし、沖縄県が置かれている状況を聴衆に考えて貰う事目的とした。初めに聴衆に全国の基地分布などを述べ、沖縄の状況を考えてもらい、次にデメリットを4つ述べた。その内容とは①に飛行機の騒音被害、②に交通の不便性、③に米軍による事件事故、④に環境問題について述べた。①の騒音被害では、私が実際に嘉手納米軍基地に訪れた際、簡易騒音計で計った騒音を聞いてもらい五月蠅さの実感をしてもらった。②の交通の不便性では沖縄にある米軍基地を地図で紹介して、この基地が主要地域にあるので県の発展を阻害していることを確認して貰った。③の米軍による事件事故では復帰以降の検挙件数が凶悪犯罪も含めゆうに 5000 件を越えていて、日米地位協定があるために日本で裁かれることもなく、密かに本国に送還されてしまうケースなどを紹介。そのケースの一つとして、1995年、沖縄のキャンプ・ハンセンに駐留するアメリカ海軍の3人が、商店街で買い物をして12歳の女子小学生を拉致。小学生は強姦され、大問題となった事を知って貰った。④の環境問題の所では現在、普天間の移設先として、辺野古沖が挙げられている事を紹介。また沖縄県知事の意見は「埋め立て地の土壌汚染の影響を示すべきだ」などと指摘。ジュゴンの生態が十分に解析されていないとして複数年調査も求めていることも説明した。ここからはメリットを述べるようになる。米軍基地のメリットとはズバリ基地経済が存在していることだ。国からの借金や高率補助金は米軍基地が存在しているからこそ出来る事だと紹介させて貰った。あとは発表のまとめを行い、私の発表は終わった。

【3. ゼミナール大会で学んだこと】 私がゼミナール大会を通して学んだことは、このような場での発表というのは、中身がいかに優れているかではなく、発表の場であるのだから発表者のテンションや見せ方、声の抑揚であったり視覚効果であったりと、やはり聴衆に興味を持たせることこそが大切な事なのだ実感出来た。折角良い論文を仕上げても、プレゼンがそれはずまらないものであれば誰も聞いてくれない。逆に内容は大したことがなくとも、興味を惹かせ、訴えたい想いがあれば話に興味を持ってくれ、それなりの評価してくれる、ということを確認出来る場となった。他人の発表を見ていて感じたことは、これが社会に出てきちんとスキルとして活かすには難しいことなのだ確信した。つまりは僕を含めみんな圧倒的にプレゼンの機会が少ないために能力が足りないのだ。もっと大学でプレゼンの機会、ないしは人前に立つ機会というのを増やすべきだと感じた。毎年行われるゼミナール大会だが、来年は是非後輩たちの発表を見てみたいと感じた。

1. 報告の要旨

「TPPによる愛媛県経済への波及効果」を報告した。TPPの概要を1章で説明し、2章でTPPによる日本へのメリット・デメリットを確認し、その影響を踏まえて愛媛県に当てはめて考えた。そして、最後にもう一步踏み込んでその農林水産業の減少額による関連産業にどれくらいの影響があるのかを調べた。愛媛県の産業構造は3つの地域に主に分かれており各地域で産業の特色があり各地域でのメリット・デメリットが明らかになった。特に製造業や卸売業に良い影響があるが1次産業には大きなダメージがあることがわかった。1次産業は全体と比べると割合はとて少なく全体としての損益はないように思えるが、愛媛の1次産業は特色品や特産物が全国的にも有名で大事な観光物であるので愛媛県の特色を潰すことになる。また、林業と東予の二次産業がつながっていることもわかり良い影響を受ける人と悪い影響を受ける人に分かれることもわかった。1次産業を壊滅させると愛媛県の経済を変えてしまい将来的にもさらに悪影響があることが予想される。産業連関表を使っているような企業に影響があることもわかり、農家の所得減少額は4分の1にもなり農家が辞めやすくなることも明らかになった。ようするに、TPPは良い影響もあるが、悪い影響を受ける1次産業を無視してまで参加必要はないと私たちは主張しました。

2. 部会での質疑応答・討論内容

道下ゼミからの質問は自分たちの論文の研究不足によるところが多く、特に他の県との比較ができてなくて、この研究を初めて見る人からしたらわかりにくい内容だったと思う。

3. ゼミナール大会で学んだこと

ゼミナール大会での各グループの発表を聞いて学ぶところは多くあった。まず発表の仕方では、自分たちのグループみたいに原稿を読まずに、原稿の内容を暗記し時々アドリブで話すことにより聞き手が聞きやすいように発表していた。また、アドリブも丁寧語で話すだけではなく、普段話すような言葉で親近感を持たし、頭に入りやすくなるように工夫していたのは学ぶところであった。これは、これから社会に出て企業のプレゼンやお客と話す時などにも生かせると私たちは考えました。

・報告の要旨

この論文は、TPP 交渉についての情報をわかりやすく伝えるため、各国の TPP に対する見方や、具体的に様々な分野を取り上げ、最終的に日本が TPP 交渉に向けてどのような準備が必要となってくるのか、という目的で作成に至った。

全ての分野を報告すると長くなるので、私たちが特に重要だと思った二つの分野について、最後の報告をする。

医療面においては、TPP 参加により日本が医療制度の自由化を認めてしまった場合、国民皆保険制度に大きな影響を与えることがわかった。しかし、国民皆保険制度の存続は最優先すると公約しているため、実際のところ影響はでないだろうという結論に落ち着いた。

農業面においては、TPP 交渉参加によって、海外の安い農産物が日本へ輸出されるなど、最も影響を受けやすいことがわかった。しかし、それに伴い日本国内では国産ブランドの生産を進めていることもわかり、国内での食糧自給率の向上や、食の安全性に対しては更に日本の農産物が優位に立てる可能性もあるため、農業業界の改善につながるだろうという結論に至った。

本来ならば、今回取り上げた、医療・金融・労働・農業以外の分野について調べることができれば、「私たちが知らない TPP 交渉の裏側」として、私たちにはあまり知られていない分野について取り上げる予定であったが、どうしても資料が少なく、調査が困難だったため、上記の分野を調査することで、より深く理解してもらおうということになった。なので、今回調べた分野についても今後の動きには注目するが、その他の分野はどうなのかということをお次の課題としたい。

・部会での討議内容

質問状では、こちらの論文で「TPP 交渉に参加し、〇〇すると危険である」と記載していることが多かったため、「そこまでのリスクを負って参加するものなのか」という指摘を受けたが、あくまでそれは日本が他国に譲歩した場合、ということをしつかり伝えきれなかったと思った。また、雇用改善という題で仮説を立てて頂いたが、私たちの班ではそのような仮説を立てて検証することはなかったため、調べた資料からの考えだけでなく、私たちの仮説もしつかり取り入れて、一つの解決策をあげられたら良かったと思った。

・ゼミナール大会で学んだこと

今回の大会では、伝えたいことをシンプルにすることが、相手に聞き入ってもらえやすいということがわかった。例えば、動画を使う、文字は少なめ、たとえ文字が多くても伝えたい場所は線引きをして強調する、など視覚から伝わる情報の方が頭に入りやすいということが他の班を見ていて感じられた。また、テーマを自分にとって馴染み深いものにするなど、自分の理解力をはっきりさせることが、説明の上手さにつながると思った。

1. 報告の要旨

テーマは『少子高齢化』について。

「少子化の歴史」少子化が始まったのは戦前。その後の変化について。

「少子化の原因」仕事と子育ての両立のできない環境であることや、結婚に対する意識の変化として未婚化・晩婚化、女性の社会進出、子育ての負担感の増加などがあげられた。

「少子化と経済学のつながり」子どもの数は需要と供給で決まる、高等教育の必要性が高まり年々教育費が高くなっている。

「少子化のデメリット」社会保障の問題(年金・医療・介護費の増大)、地方の過疎化、勤労世代の負担の増加(日本は年金が賦課方式だから少子化により負担が大きくなる)、経済成長率の低下。

「学生の少子化に対する意識調査」松山大学対象に少子化に対する意識調査を行った。結婚について・欲しい子どもの数・育児休暇について・子どもができてからの生活スタイル・国に求める政策など。

「その結果」結婚したいという人がほとんど。欲しい子どもの数の結果を見ると、2人を考えている人がほとんどだった。育児休暇については、男女問わず取得したい、子育てに参加したいと考えている。子どもができてからの生活スタイルについては、保育所などの施設を利用し、共働きを選ぶ人が多かった。国に求める政策としては、小中高の学費無償化を選んだ人が多かった。しかし、ここで問題点が見つかった。現在、国が行おうとしている政策について知られていないということ。学生に情報が届いていないという現状が見られた。

松山大学の学生が今回のアンケート通りに結婚し、2人出産すれば、人口を維持することがここではできることがわかる。これが日本全国でできるような政策が生まれ、その政策を推進していける社会になれば、少子化の進行は遅らせることができ、同時に出生率をのばすことができる。

2. 部会での質疑応答・討論内容

- ・子育て支援の財源がどこからくるのか
→消費税の増税分から
- ・保育所制度の問題点
→待機児童の増加、保育士不足、保育施設の不足
- ・男性の育児参加率を上げるためには
→男性のための育児サークルなど

3. ゼミナール大会で学んだこと

一つのテーマについて調べていくと、更に新しい疑問点や問題点が出てきて、いろいろな角度から物事を考えることができ、また深い所まで追究することができたので良かったです。少子化について知らなかったことがたくさんありました。また、班のみんなの一つのものをつくりあげるということで、役割分担や協力が必要となり、そこで率先して動くよう心がけました。どんな小さな集団でも、リーダーとして引っ張っていく存在の必要性をすごく感じました。そして、一人ひとりがしっかりと理解してやっていかなければならないため、みんなが積極的に参加し、責任感を持ってしっかりと動いていました。ゼミナール大会当日、聞く側の人たちをどれだけ注目させるかというのも大事なポイントだなと感じました。スライドの作り方や配布する資料も、それ次第で注目度が変化していくと感じました。今回のゼミナール大会での経験は、就職後、会社での自分の役割を把握し率先して動く力、発信していく力になったと思います。

1. 報告の要旨

宮本ゼミ A 班は、「将来自分たちは本当に年金をもらえるのか」というテーマで報告をしました。自分たちは、現在の年金制度を廃止するべきであると結論を出し、まず、年金の制度、代表的な年金の支給方法などを説明し、政府が掲げている『年金 100 年安心プラン』をとりあげ、「少子高齢化が進展しても、年金に対して税金の投入割合を高齢化率に応じて増やしていくので安心である」という政府の指針をみていきました。しかしこれは、税金の投入割合を増やすという点から、間接的に自分たちの負担が増えるということを表しているといえます。年金の収入の割合の約 40%が保険料収入であることをグラフで表し、負担が増えることを説明しました。次に、出生年別にみた年金の受取金額を表したグラフを出し、今の年金制度のままでは、自分たちの生まれた 90 年代の人々は 2000 万円の損をすることを説明しました。日本の個人金融資産の約 6 割が 60 代以上の高齢者が保有していることもふまえ、現役世代の負担が重すぎるのではないかと主張しました。高度経済成長期で経済発展を続けていた時代なら、現在の賦課方式の年金制度を維持することができていましたが、高齢者の割合も増え、それがいまの日本の経済状態では困難であると考え、年金を廃止し、生活保護も含めた公的扶助全体の改革が必要であることを主張しました。現在年金に投入されている税金金額の 15 兆円が、近い未来の消費税増税による増収よりも多く、この税金投入金額が、高齢化の進行に伴ってさらに膨れ上がること。また、年金が廃止され、月収 30 万円のサラリーマンが 40 年間保険料を納めたとしたときのトータル 2400 万円の保険料が給料にまわれば消費が増え、日本経済復活の起爆剤になることを訴え、公的年金は廃止し、自分の責任で管理すること、その意識を高めていくことが必要であることを主張し、報告しました。

2. 部会での討論内容

第 3 部会では、6 班中 3 班が TPP について報告し、他の班は少子高齢化、年金問題、医療扶助制度の問題点と解決策についてそれぞれ報告をしました。3 班が TPP について報告をしていましたが、川東ゼミ A 班は日本からみた TPP 問題、間宮ゼミ B 班は愛媛県経済の立場からみた TPP、道下ゼミ B 班は日本の TPP 参加について自分たちがどう考えるか、という点からそれぞれ報告をしていました。溝渕ゼミ A 班は少子高齢化について原因・デメリットを挙げ、男性が子育てに協力する国は出生率が高いことから、育児休暇制度を利用するなどして男性が子育てに積極的に参加することで出生率が上がり、少子化のスピードを遅らせることができるとまとめ、報告していました。柳原ゼミ A 班については、医療扶助費用を一部負担にすることで、生活保護費用の増加を改善することができると主張していて、一部負担にすることで過剰受信を削減することができるのではないかと、ジェネリック医薬品の選択率を上げることによって医療扶助費を削減できるのではないかと。などいくつかの仮説を立てながら自分たちの主張が述べられていました。

3. ゼミナール大会で学んだこと

自分たちの報告や他の班の報告を比較し、TPP ひとつについて考えるのにも、国から、地方から、などいろいろな視点からそれぞれのメリット、デメリットが挙げることができ、それについて自分たちがどう思うのか、立場の数だけそれぞれの主張があるのだと感じました。主張の仕方についても、仮説検証をし、情報を整理しながら自分たちの主張が正しいかどうかを述べることで、より説得力のある内容にすることができるのだと思いました。

まず、川東 A 班は、沖縄の米軍基地について、米軍基地があることによって生じるメリット・デメリット、本人の意見を述べていました。デメリットとして、飛行機・ヘリコプターの騒音被害、沖縄の真ん中にあることによる交通の不便、米兵による事件、などが挙げられました。メリットとしては、軍用地料として多額の補助金をもらっており、沖縄の自主財源の低さから重要なものであると述べておりました。最後に、なくなつては困るものだがいずれは無くさないといけないものなので、それならば早いほうがいいと主張しておりました。

間宮 B 班は、TPP が日本に与える影響についての発表でした。TPP の概要の説明、TPP に参加することによって日本全体に生じるメリット・デメリット、それに加え愛媛県だけに視点を当ててメリット・デメリットを述べていました。それらから考察し、最終的に愛媛県としては、TPP に参加するべきではないと主張しておりました。

道下 B 班は、日本の TPP 参加についての発表でした。まず TPP の説明から始まり、アメリカ、中国、各国が TPP に対してどのような立場にあるのかを述べていました。また医療、金融・投資、各分野の視点から見た TPP について述べておりました。また、自国の農業から TPP について述べておりました。最後に班の意見として、TPP 参加交渉の今後について抽象的に述べておりました。

溝渕 A 班は、少子高齢化についての発表でした。少子化の原因から、少子化によるデメリットを述べておりました。また松大生からアンケートをとっておりその結果から、結婚したい人の割合、ほしい子供の数、さらに、子供がほしい理由、子供が生まれてからの生活スタイル、育児休暇を取りたいか・またその理由、相手に育児休暇を取って欲しいか・またその理由、がわかりました。最後にまとめとして、男性が子育てに協力する国は出生率が高いことから、育児休暇制度を利用するなどして男性が子育てに積極的に参加すれば出生率が上がり少子化のスピートが遅らせるのではないかと主張しておりました。

宮本 A 班は、日本の年金制度についての発表でした。現在の年金制度についての説明から始まり、結論を今の制度のわかりづらさから、現在の高齢者と同程度の年金をもらうには保険料を上げるしかないとして、そこまでして、国から年金をもらいたいかどうかということの問題提起としておりました。リバタリアニズムから公的年金から私的年金への移行、年金廃止に伴う問題点を挙げ、その対応について述べておりました。また廃止によるメリットを挙げ、結論として、年金廃止と老後の国への依存をやめて自己責任の時代にしていけば良いと主張しておりました。

柳原 A 班である私達の班は、生活保護制度から生活保護費用の削減に視点を当て、その削減方法を医療費の一部負担として、受診料、医薬品、入院費用の各視点から見ました。結論として、受診料・医薬品は一部負担をするべきとし、入院費用は一部負担が厳しい為、既存の病棟を精神障害者退院支援施設として運用し、コストをかけずに退院後の受け入れ施設をつくれれば良いと主張しました。

質疑応答では、質問内容が多すぎたことによる質問の厳選、相手の質問がうまく受け取られていないのでは無いかと思うようなことがありました。私達の班の質問も長すぎたせいか好意的に受け取ってもらえなかった節があります。

大会を通して、班員の仕事の偏り、そのことに対する見えない不満などがあり、これだけの人数を平等に作業分担することの難しさを感じました。またこのように何人か集まって発表物・論文を作ることはなかなか無いので、作業を通して学んだ対人関係の難しさ、発表物を作る大変さは今後には生かせるような経験になったのではないかと思います。

1. 報告の要旨

好成績を残せる選手というのはどういった選手なのか、それを「スポーツ心理」の側面から分析しました。指導者・キャプテンなどのリーダー目線と選手目線から分析するために、「モチベーション」、「プラス・マイナス思考」、「集団心理」の3つの観点から理論的背景を調べました。これらの理論背景が実践されているかどうかを調べるために、高校や大学のリーダー達へインタビューを行い、実際に理論が採用されていることを確認しました。

2. 部会での質疑応答・討論内容

今回のゼミ大会では、部会内で質疑応答や討論するという時間が設けられなかったため、討論はしていません。

3. ゼミナール大会で学んだこと

私たちがこの一年間で学んだことは3つあります。1つ目は「チームワークの大切さ」です。グループの人数は6人と、決して多くはありませんが、一人一人の予定を合わせながら活動していくことは予想以上に困難でした。しかしその分、全員が集まった時の時間を大切にしていきました。私たちが発表した内容の中にもある、「チームワークの高いチームはより高いパフォーマンスを発揮する」というように、チームワークの高まってきた9月のゼミ合宿以降は集中して論文やプレゼンの作成に取り組むことが出来たと思います。その結果、ゼミ大会当日も平常心で高いパフォーマンスを発揮することが出来ました。

2つ目は「目標を掲げることの大切さ」です。今回のゼミ活動を通して目標の存在が自身のモチベーションや、原動力に繋がるということを学びました。「ゼミナール大会で最優秀賞を獲る。」という目標を掲げることで行き詰まったり壁にぶつかったりした時でも前向きに取り組むことが出来たと思います。また、時期に応じた目標を設定していくことで、11ヶ月という長い期間でもモチベーションを保ち続けることが出来ました。

3つ目は「時間の大切さ」です。これは今回の私たちの反省点でもあります。このゼミ大会当日までの期間で、提出期限などの時間を守れなかったことが3回もありました。これは先生だけでなく他のグループの方々にも迷惑をかけてしまいました。これをしないためにもどうすればよいかを考えました。まず、(1)スケジュール管理する物を1つではなく複数の物にしておくということ。(2)チーム内での情報共有をしっかり行うということ。(3)期日直前になって確認を取るのではなく、定期的に確認を取り合うということです。

今回私たちはスポーツ心理について研究してきましたが、このことはスポーツの場面だけでなく、社会においても全く同じことが言えるということに気づきました。会社でミスをして落ち込んだ時には自己暗示などで自分の気持ちをプラスへと持って行き、次の仕事に対しても高い意識で頑張れると思います。また目標を掲げることで何をすべきかが明確となり、高いモチベーションで行うことが出来るでしょう。そして会社というチームの中でリーダーシップを発揮し、チームワーク向上につなげることで、より良い集団にすることが出来ます。これらのことを意識し、今回研究したことを残りの学生生活や社会に出ても生かしていきます。

1) 報告の要旨

論文では 2020 年東京オリンピック開催を受けオリンピック開催は本当に良かったのか、デメリットも数多く存在するのではないかと考え、東京オリンピックを成功させるため、過去の都市の経済効果、問題を取り上げていく。過去の経済効果につきましてはアテネ、北京を用いた。両国ともインフラ整備など莫大な経済効果を生み出すことに成功した。しかし、アテネ、北京では各国ならではの問題が生じている。アテネではスタジアム建設などに力を入れすぎたため、財政の圧迫を招いてしまった。北京では都市の開発のため、労働条件を無視した雇用、水の搾取など問題を提起した。2016 年リオデジャネイロオリンピックの経済効果予測を行い、リオデジャネイロならではの問題についても取り上げた。そして、1964 年東京オリンピックについてまとめ、2020 年東京オリンピックの経済効果予測、取り組みについてまとめた。日本の問題、被災地支援策、経済効果予測についてまとめ上げた。以上が論文のたまかな内容です。

2) 部会での討論内容

私たちの報告内容は、オリンピックによる経済効果についてであり、2020 年東京オリンピックの経済効果予測、取り組みについて重点をおいて報告を行った。1 章では過去のオリンピック開催地の経済効果ここではアテネオリンピック、北京オリンピックについて報告を行った。ここではオリンピックを開催すると莫大な経済効果をもたらすというメリットを押ししました。2 章ではオリンピックでの諸問題について取り上げました。アテネオリンピックでは財政の圧迫。北京オリンピックでは貧困農民の労働条件を取り上げ、問題を提起しました。3 章ではリオデジャネイロオリンピックの経済効果予測について報告を行い。経済効果は赤字となることを提起し、その理由について報告を行った。4 章では 1964 年東京オリンピックについてまとめ日本にとってのオリンピック開催はどのように映っていたのかを取り上げた。最終章 6 章では、2020 年東京オリンピックの経済効果予測、取り組みについて報告した。東京オリンピック開催により莫大な経済効果をもたらす反面、原発など日本の問題を提起し、まとめでは、オリンピック開催には多くのメリットが存在するが、問題を数多く存在する。これらを踏まえ、2020 年東京オリンピックでは原発問題、被災地問題を解決しなければ、開催してはならないとの班の意見を報告し、15 分間のプレゼンを終えました。

3) ゼミナール大会で学んだこと

ゼミナール大会では、準備期間の間で数多くのことを学ぶことができました。班員をまとめる大変さ、役割分担、指示する難しさを学びました。良いものを作ろうと思えば、代表者がしっかり班員をまとめなければならず、行動を起こすことが大変でした。代表者を経験し、自分にとってはプラスになることばかり体験することができたため良かったです。そして、一番は班員と協力することで協調性の大切さを学びました。和を乱すことを行えば、作業がストップしてしまうなど問題が生じました。班員が協調し合うことにより、良い作品を作ることが可能になると学ぶことができました。

ゼミナール大会はともしんどく、長い期間準備を行いました。なによりもゼミでの思い出を作ることができ、ゼミの結束が強くなったと思います。

1. 論文内容と結論

私は、国体の開催地における波及効果 - 2017 年の愛媛大会を中心に - という題材でゼミナール大会に出場した。主な内容は 1) 国体の概要・愛媛県の主な都市整備、2) ゆるきゃらグランプリ・B1 グランプリ、3) 愛媛国体を成功に導くために (過去開催地の失敗・夕張の失敗)、4) 成功するために、という内容である。国体だけでなく大規模行事などからも活かせることを見つけ、国体を成功に導くというプレゼンテーションであった。

結論としては、現在の状況では施設の維持費や都市再開発に関して問題点も多く改善の余地があるということであった。とりわけ、過去の大会の失敗から学んでいる部分もあるが、依然として充分とは言えない現状であった。その改善策として、競技ごとに区別して同じ会場で日程を長くして行うなど、既存の施設の有効活用を取り上げよう。

2. 大会でのやり取り

大会では、どのグループも質問状への返答のみで見学者からの質問等は全くなかった。発表者内ではうまく話を進めることができていたと思える。

質問状は国体に対しての私の意見を求められていたことが、最も心に残っている。とはいえ、自分が論文を作っていくうえで、自分の意見を織り交ぜながら出来なかったために、あまり相手に上手に伝えられていなかった。

3. 反省点

今回のゼミナール大会でよかった点は、私が思っている以上にはきはきと話すことができたことである。今までの自分ならばうまく話すことができず、趣旨を正確に伝えにくかったが、今回は緊張せず堂々と話すことができました。パワーポイントの工夫も充分行うことができ、見る人を退屈にさせないように、興味の湧くものにすることができたと思う。

反省点は、ゼミナール大会へ向けた準備が甘すぎたことである。私の目標は、原稿を作らず授業形式に持ち込むということだったが、ただ書いている内容を話している作文のようなものになってしまった。パワーポイントの中に書いてあることに関しては、きはき話せていたと思うが、私が伝えたかったことには全く足りず、準備の甘さを反省しました。

ゼミナール大会で私が得た経験を、今後始まる就職活動に十分生かしていきたいと思う。一人で論文制作の貴重な体験ができたので、卒業論文の作成や社会での企業プレゼンなどにつなげるよう、努力して行きたい。

報告論文の要旨

近年、ハイブリッドカー、電気自動車、燃料電池自動車などの様々なエコカーが徐々に普及してきており、まずはそれらのメリット・デメリットについて検証した。

最近では、石油はどんどん減少しており、石油に代わる新エネルギーを開発していかなければならない現状にある。いま、地球温暖化問題が深刻になっており、将来の地球環境への影響が大きいため、CO₂(温室効果ガス)を出さないエコカーを、これから普及させていくべきであると考えた。そのために行われている各メーカーの企業戦略、各国での電気自動車の普及、エコカーの構造と性能についても研究した。しかし同時に多くの克服すべき課題があることに気付いた。

電池のエネルギー容量の少なさ、新しい技術であるが故の安全性の低さ、充電器の普及がまだ少ないためのインフラ不足、全体的なコストなど、これらの問題点を解決することで普及が進んでいくと考えた。そして石油に代わる代替燃料について触れ、次世代のエコカーについてどのようなものがあるのかということについて検証した。

部会での討論内容・質疑応答について

今回、私たちの班は「エコカーの将来」という題で研究を進め、発表した。質疑応答については、事前に出された質問状をもとに回答した。具体的には、電気自動車の価格について、普及率の数値、充電器の設置件数などの実証的なデータを問う質問に対しては、きちんと回答をすることができた。しかし、こちら側の研究が不十分なこともあり、十分な回答を準備できなかった部分もあるように思った。

ゼミナール大会で学んだこと

今回、私たちが参加した部会では、5つのゼミが発表を行った。それぞれの班が研究をよく詰めてあって、とても素晴らしい発表ばかりだった。私たちの班の発表にはない点が多くあった。ある班は、スポーツ心理の研究として、部活の顧問やリーダーなどに、選手のモチベーションを高めるためにしていることなど、実際にインタビューしていた。私たちはひたすら文献やインターネットなどで情報を収集し論文にまとめるという方法で、微視的な発表内容になってしまったように思った。また、どの班もスライドに工夫がなされていた。特に注目してほしい所は文字の色を変えたり、写真やグラフなどを多く取り入れたりすることで視覚的に非常にわかりやすくなっていた。また、最も感心したのは話し方である。どの班も練習を繰り返し行った様子がうかがえた。話す内容をしっかり覚え、聞き手と目を合わせながら、また、時には身振り手振りを交えながら発表をしており、非常に伝えようとする気持ちが強く感じられ、聞き手としては感心する点が多くあった。

このように、他の班の完成度の高さを実感すると同時に、私たちの班は様々な面において準備が不十分で、詰めが甘かったと感じた。発表の情報量に関しては十分だったが、15分で余裕をもって発表できる程度までまとめられてなかったように感じた。

1、報告の要旨

海外における日本のマンガやアニメをはじめとするコンテンツ産業は絶大な人気を集めていた。さらに、近年、日本の製造業は衰退傾向にあり、政府は文化大国を目指し、官民を挙げて 2002 年から「クールジャパン」としてマンガやアニメなどの日本文化輸出キャンペーンに乗り出した。しかし、11 年経った現在、マンガやアニメ中心のクールジャパンは精彩を欠いている。また、安倍政権の打ち出したアベノミクス三本の矢の 1 つでもある成長戦略の中にクールジャパンがあり、国としても日本文化の輸出は大きな収益になると期待もされている。そこで、私たちはなぜうまくいかなかったのか、問題点を調べた結果、コンテンツ産業ではなく、日本食等を代表とするサービス業を売りにしたクールジャパン戦略の方が日本の収益を増やすことができるのではないかと考えた。そこで本論ではなぜ、サービス業が適しているのか明らかにし、その上で私たち自身の考えるクールジャパン戦略を打ち出していき、論文としてまとめた。

2、部会での報告内容

私たちの班は部会では 2 つのことを主張した。1 つ目はクールジャパンがなぜ必要とされているのかについて日本の貿易収支や国際旅行収支を基に説明した。また、これまでのクールジャパン戦略の成果を通して、文化を海外へ輸出していくことのメリットやデメリットも主張した。2 つ目はこのクールジャパンの課題から今までのアニメやマンガ中心だったクールジャパンからサービス業中心へ転換すべきであるという自分たちの意見を主張した。さらに、サービス業の中でも私たちは日本食とおもてなしを売り出していくべきと報告した。日本食の例として私たちの班は「低価格・低カロリーな大豆料理を日本らしい接客や外観などで海外のお客様をもてなす」、大豆屋の海外輸出を提案した。

3、ゼミナール大会で学んだこと

まず、論文制作のときは単にネットや文献からの情報を貼り付けるのではなく、自分たちの主張を踏まえてまとめることが最も重要だと思った。2 万字という字数の論文を作るためにも独自性のある主張と具体的に説得力のある根拠の必要性を感じた。また、論文の書式や構成、参考文献の記載なども学ぶことができた。

次に、スライド制作では見やすい文字数やアニメーションなどスライド構成では聞き手を意識した。特にスライドの文字数は一目見て要点がわかるようにシンプルなつくりにした。

最後に報告の際はプレゼンは聞いている人に対して行うものなので、原稿を読むだけではなく、聞き手のための身振りや声の大きさを注意しつつ報告をした。他のゼミの報告を聞くことで学んだことも多くあった。例えば、原稿を持って報告していると視線が下に行きがちになるのだが、原稿を覚え報告したゼミがあり、前を向き報告したことで内容が入ってきやすかったため、非常に勉強になった。これらのことは今後、就活の面接などでも生かせるのではないかと感じる。

1. 報告論文の要旨

馬ゼミ A 班は、「収入格差」について報告を行った。本論文では、年収 300 万円以下の人口を減らすために観光分野と農業分野を自動車産業のように、世界レベルで勝ち残ることができる日本の基幹産業にすることを目的としている。まず、日本の経済状況と収入格差の現状について示し、収入格差が起こった背景を説明する。次に、このまま収入格差を放置することで日本がどうなっていくのかを言及する。訪日外国人が日本で不便に思うこと・思ったことを指摘する。世界的に未熟だがこれから日本の基幹産業になりうる資質を秘めている観光分野と農業分野の現状を示し、それらを日本の基幹産業にしていくための必要な課題や目標を提示することにより年収 300 万円以下の人口減らすことを目的としている。

2. 質疑応答

Q p6 男性の全年齢の平均収入が 502 万円に対して女性の全年齢の平均収入は 268 万円と男女間の収入格差も感じられる。その格差の主な原因となっている平均勤続年数や管理職比率の差異で、特に女性管理職の割合はアメリカ、ドイツ、イギリス、スウェーデンに比べると日本はまだとても低いものだと言える。男女間の収入格差は今後解消されていくと考えるか？

A 労働者が性別により差別されることなく、その能力を十分に発揮できる雇用環境を整備することは重要な課題であり、男女雇用機会均等法の施行により男女均等取扱いの法的枠組みは整備されてきたところです。法整備の進展に伴い、企業においても女性の職域が拡大し、管理職に占める女性の割合も上昇傾向にあるなど女性の活躍が進んでいます。このような進展にもかかわらず、労働者全体を平均して見た時の男女間賃金格差は依然として存在しています。日本人に男尊女卑という意識が根強く残っていることが原因だと考えています。男尊女卑という意識をなくしていくことが男女間の収入格差の解消につながっていくと思います。

Q p13, 14 日外国人が不便・不満に思うことという調査で明らかになった課題の改善と観光関連の予算を増やす以外にこれからどのような事をすれば訪日外国人旅行者を増加させることができると考えるか？

A 外国の旅行会社招請事業やツアー共同広告事業等の旅行会社と連携した取り組みいっそうと強化をしていくことで訪日外国人旅行者を増やすことができます。

Q p16 グリーンルームを導入することでどのように雇用が生まれるのか？雇用が生まれるとして後継者不足（若者の農業離れ）の問題解決に繋がるのか？

A 商店街の空き店舗にグリーンルームを導入することで、グリーンルームで栽培している野菜などの水・温度・光・養分を管理する雇用やグリーンルームでできた野菜を運搬(海路・空路・陸路)する雇用が生まれます。またグリーンルーム用にマンションを建設する場合建設業にも雇用が生まれます。職業を選ぶにあたって労働環境や雇用形態や収入を重視すると思います。温度や湿度などの環境が一定で、一日の作業時間もほぼ決まっていることから働きやすい生産現場であり、日本の基幹産業になっていくことで収入も増加します。こんなに好条件な職業に就きたいと思う若者は増加するに違いありません。

3. ゼミナール大会で学んだこと

大学に入学し本格的に経済について学びその知識を生かしたテーマで発表することができたことを嬉しく思っている。「収入格差」について調べているうちに今まで理解していたこと間違いに気づきました、新たなことを学ぶことができた。私が調べたことはほんの一部にしかすぎないが知識を深めることができたと思っている。緊張のせいか自分のイメージ通りに発表を終わらすことはできなかったが、ゼミナール大会での経験が社会に出たときに役立つように反省すべき点を反省し、次の発表する機会に生かしていきたいと思う。

1. 報告の要旨

我々は「三津浜商店街の活性化」を主題として論文を執筆した。また、大会ではその内容について報告を行った。報告の要旨は以下の通りである。

全国の商店街が衰退していく理由には、一般的に少子高齢化や自動車の普及に伴う交通手段の多様化、経済分野の規制緩和策などが挙げられる。これは三津浜商店街にとっても例外ではない。事実、周辺には大型店舗が散在し、商店街を尻目に賑わいを見せているのだ。こういった社会的側面は無視できないものの、その是正を述べることは我々の力量が及ばないと判断した。そこで、角度を変えて人と人の関係性、交流から顧客を獲得する戦略について言及しつつ論を展開した。結論に至るまでに三津浜商店街の盛衰と現状、当地のまちづくりの状況を考察し、3つのポイントを提示した。

①店主の経営努力

②持続的な活性化のために長期的な視点を持つこと

③地域住民との交流を促進させること

我々は以上の3つのポイントを指摘しつつ、結論を「長期的な視野を持ち、交流を重視した場所を作り、それをまちづくりの象徴として機能させる」とした。

2. 部会での討論内容

報告会であったため討論は行われなかったが、事前に幾つか質問が届いていたので、質疑応答の時間にその回答を行った。質問内容は多様であり、中でもデータによる根拠を示して欲しいという質問に対しては、関連するデータが見つからず、十分な回答が出来なかった。一方で、事前に論文を渡しており熟読した上で質問を作成されるはずなのだが、一部の外れな質問も存在していた。

3. ゼミナール大会で学んだこと

我々は6人グループでゼミナール大会に向けて取り組んだ。しかし、準備時間が膨大にあったのにも関わらず論文の内容は却って薄弱且つ脆弱なものとなってしまった。その理由を改めて考えてみると、私個人としての、班の代表であるという自覚が足りなかったからなのかもしれない。仲間に積極的に働きかけるべきだったと少し後悔の念が残っている。

だが、それとは別に、実際に現地に赴き調べたことやインタビューをしたことなどの経験が得られたことを考えると、結果的にプラスになったといえるだろう。また、パワーポイントやレジユメの作成といった基本的なスキルを使用する活動が学内では意外に行われていないことを加味すれば、ゼミナール大会を経て実践的スキルが向上したともいえる。

1. 報告の要旨

私たちのグループではテーマとして、「経済危機におけるアベノミクス」ということをあげました。まず、はじめに私たちの班がなぜアベノミクスということテーマを設定したのかを述べています。次に近代の二大経済危機であるリーマンショックとユーロ危機について述べ、その影響が日本にどのような影響をもたらしているのかということについて述べています。そしてそのような大きな影響を受けている日本経済に対して、アベノミクスはどのような良い効果をもたらし、日本を良い方向に導いていくのかということについて述べました。アベノミクスの柱となっている三本の矢について、またアベノミクスの効果、課題、批判などのことを中心に述べています。そしてその後、松山大学の学生を対象に行ったアンケートの結果について述べています。私たちの班では最初インターネットなどの情報から、日本は経済危機に陥っていないという前提で話を進めていこうと考えていましたが、アンケートをとってみると松山大学の学生の意見としては、日本は経済危機に陥っていると考えている学生が多いことがわかり、私たちの班も日本は経済危機に陥っているという前提で話を進めていくことにしました。そして、最後にまとめとして、アベノミクスは現在のところ良い効果の方が悪い効果よりも大きいので、アベノミクスは機能しているという結論を出しました。

2. 部会での討論内容

部会では、論文の内容を簡潔にまとめたものを報告しました。まず、自分たちがなぜテーマをアベノミクスにしたのかということについて話しました。そしてその後、松山大学の学生を対象に行ったアンケートの細かい内容について話しました。そしてその後からはリーマンショック、ユーロ危機、日本への影響を大まかに説明し、アベノミクスの三本の矢などについての所を詳しく多めに説明しました。そして最後に、アベノミクスはきちんと機能しているということを班の結論としてあげ、その理由について国民のアベノミクスに対する期待が大きいということが機能していると考えの一つの理由であると示しました。そして、それらのことについて詳しく説明していきました。

3. ゼミナール大会で学んだこと

今回のゼミナール大会で1つの論文をみんなで作り上げていくことの大変さを学びました。全員を同じぐらいの仕事量にするという所が難しかったり、みんなで時間を合わせて集まることもそれぞれが忙しかったりしたので難しかったです。書いている人が違うので論文にまとまりがなかったり、文章が上手につながっていなかったりもしました。しかし、そのような中でも全員が協力して、論文をまとめたりパワーポイントを作ったりしてゼミナール大会本番できちんと報告することができたのは私たちの班一人一人にとって、とてもいい経験となりました。チームワーク力の大切さなどについても同時に学んで行けたのではないかと思います。ここで学んだことを一人一人が生かしてこれからの学生生活頑張っていこうと思います。

1. 報告の要旨

「文書・映像のデジタル化がもたらすビジネス変革を考える。」というテーマで論文作成をしました。論点は「インターネットを利用した書籍の販売が書店の廃業をもたらしてきているが、最近はもちろん、文書・映像のデジタル化が急速に拡大しようとしている。このような変革が、既存の書店業界、新聞業界、テレビ業界、ゲーム業界等にどのような影響を与えることになるかを、各業界別に考察する」ことです。論文は1章「書籍の電子化が書店にもたらす影響を考える。」、2章「新聞の電子版拡大が新聞業界にもたらす影響を考える。」、3章「放送のデジタル化及びネット配信が放送業界にもたらす影響を考える。」、4章「ソーシャルゲームがゲーム業界にもたらす影響を考える。」から構成されています。これから私たちがどのようにデジタル化と向き合っていくかについて考えました。

2. 部会での質疑応答

事前に道下ゼミからたくさんの質問をいただいていたため、3問お答えしました。「グラフ1から、なぜ書店数が減少＝ネット通販界のトップはアマゾンとなっていると思いますか?」「電子コミックならではの機能とはどのようなものがあると思いますか?」「2章の3のどの戦略がより妥当であるか、まだ結論を出すことはできないとあるが、班としてはどの戦略が妥当であると思いますか?」という質問にこたえさせていただきました。また、質問状で聞かれたとことで、プレゼンテーション時に説明できる事はプレゼンテーション中に入れ込んで発表しました。

3. ゼミナール大会で学んだこと

リーダーシップの大変さを学びました。大学生活の中で自身の主体性を活かしたいという考えから、ゼミナールのリーダーとして活動しました。最初メンバー18人全員がスケジュールを把握しておらず、何をすればよいかわからない、人任せにするメンバーが多かったです。そこで私はメンバー全員が責任を持って大会に臨めるように、提出期限・スケジュールの確認・細かく進捗状況の把握をしました。その結果、メンバー18人全員が期日を守ることができ、自分の仕事を率先して取り組むようになり、スムーズに準備ができました。

リーダーとしてグループの指揮を上げるため、苦勞の毎日でしたが、皆が付いてきてくださったおかげで、より良い発表ができたと思います。よい経験となりました。

1. 2010年1月1日にインターネットを使ったダウンロードの規制が厳しくなり、刑罰化された。しかし、認知度も低く、メリットが挙げられず、効果はほぼないと言えることを問題視し、どのような対策が最適であるか報告した。

まず、著作権について。さらに、これを根源に発生する「著作権侵害の事例」、著作権を重視する「ディズニー」などに着目し、著作権の問題を具体的に挙げた。次に、違法ダウンロードと、これが発生する原因と事例、さらに以前から取り締まれている違法アップロードについて調べた。違法ダウンロードの定義の曖昧さが問題であると考えた。

また、違法ダウンロードは日本だけに収まる問題ではなく、世界各国で問題視されていることから、日本、アメリカ、中国の現状と人々の意識を比較・検討した。アメリカ・日本と異なり、中国は模倣品撲滅活動をしている等、国ごとの差を見出した。日本人の意識の問題では、若者の意識の低さが顕著だった。さらに、諸外国の取組である Spotify や Pandora、スリーストライク法など、有効と考える具体的政策を述べた。

最後に、これらを踏まえ、経済的な損失を減らすため、日本がこれからすべき取組を提案した。違法ダウンロードの定義を明確にし、前例をつくること。さらに、成功例である「アメとムチ」をうまく利用した Spotify と法律のバランスのとれた政策を参考に、時代にフィットしたシステムの開発が打開策であるとする。また、若年層の意識を高めるため、海外では既存の「パンフレット制作」や、教育の徹底が必要だと考える。

2. 質疑応答の一部です。中国で日本のキャラクターに似せているきぐるみを来てテーマパークなどにいるのをテレビでよく目にしますが、実際に著作権の問題になったことはあるのですか？一着ぐるみに関してはありませんでした。似たようなものに訴訟事件があり、日本企業の商標である「クレヨンしんちゃん」の商標が中国企業によって勝手に登録されたことにより、日本企業が訴訟を起こしました。

古書店が売り上げの一部を若手漫画家の育成支援にまわすと表明したがその後実施されなかった、とあるがなぜ実施されなかったか。一その後、漫画喫茶という新たな市場ができ、新古書店の売上も伸びなくなったからです。また、新古書店と作家・出版社の摩擦が「万引きや不正返品」の点で意見がまとまらず、強まったことも原因といえます。

新古書店と古書店は、どこが違うのですか。新古書店が成長した時期、理由を教えてください。一新古書店とは、人気かつ、供給の多い本を中心に売買する古書店のことをいいます。(例:ブックオフ)成長したのは、2001年ごろで、不景気による節約志向もこのビジネスが成長した理由だと考えられています。

3. 計画的に物事を進めるとともに、分担・協力する大切さを感じ、さらに、自分の考えを人に伝えたり、文章にしたりする難しさを学ぶことができました。締切の存在などで、時間を意識して行動できたと思います。質問作成をするにあたり、自らの論文を見直すことができました。ゼミナール大会を通して、自身の知識を蓄えるだけでなく、少なからず成長できたと思います。他ゼミの発表で、知識も得られました。

報告論文の要旨

以下のことをまとめ、プレゼンテーションしました。

テーマ「原子力発電の再稼働について」

- ・電力会社の電源構成
- ・原子力発電のメリット・デメリット
- ・放射線による人体への有害性
- ・原発事故による第一次産業への影響
- ・2020年東京オリンピックに向けて

光藤ゼミからの質問状・それに対する回答

質問1. なぜ敦賀2号機のように活断層の上に原発を建設したのか？

回答 これは建設した後に技術の進歩によって下に活断層があることが分かったため。

質問2. 2013年11月18日から東京電力福島第1原発4号機からの使用済み核燃料の取り出しが始まったが、作業中の課題と取り出し後の課題は何か？

回答 これまで見つからなかった燃料の損傷やがれきが新たに見つかるおそれがある。また、細かいがれきが燃料を収める容器と燃料との隙間に入り込んでいるとみられ、作業の際に燃料が抜けなくなったり、損傷したりする懸念もある。

- ・ まず使用済み核燃料の保管、汚染水の保管・対応など問題は山積みとなっている。

ゼミナール大会に参加して得たこと

今回自分たちが調べたことをまとめて形にして報告を行いました。自分たち以外の班の報告は自分たちのものより完成されたものだと思います。

資料の作り方、その説明の仕方、パワーポイントの文章も簡潔に分かりやすくまとめられていました。自分たちの間では正直なところ形になったところで満足していた部分があったと思います。しかし他の班はそこからより良くしようと考え、訂正して作り上げてきたのだと感じました。これだけではだめだと実感することができただけでも役にたつものになったと思います。

また、こういう機会があれば、今回よりも満足のいくプレゼンテーションをしたいと考えています。

1、報告の要旨

私は発表した趣旨は社会にでて働くうえで必要なスキルは何かを見つめ、その克服に自分たち自身が何をすべきかを見つめ、その克服に結び付けることであった。

まずその提案の一つとして社会に出て雇用される試験での大学の勉強との結びつきについて発表した。大きく公務員試験編と民間試験編に分けた。公務員試験においては経済学生にとってとても有利になる、経済原論という科目があることについて発表した。民間試験においてはTOEICなどの今後のコミュニケーション能力の必要性を問われるため、昇進の上で英語能力が問われる事について発表した。

次に私が発表したのは社会に出る前に身に着きたい技術として自学の進めについて発表した。社会に出て新たに技術を身に着けるには労力ともう一つコストが掛かる。技術を身に着けるために講座を受講すると人件費がかかる。すると、自分で参考書を買って、自分で問題集などを解いてテスト対策にする方がコストの面で安上がりだし、実際、合格者の方々はそのように自学の徹底して行ってこられた方が多いであろう。

また、具体的に何を勉強すればよいかわからない人にお勧めしたのが労働法である。今の社会問題としてブラック企業の問題がある。そのため、雇用される側の権利を知っておけば自分がその問題のブラック企業に入った時に正当な知識をもって雇用者と関われるからである。具体的な事例を挙げると、残業代の未払い料を書き留めておけば後で帰ってくる話がある。

その次はメモの進めについて発表した。また、偉人たちからの言葉として自殺の就活生がいる社会情勢に中国の諺を使って自分が年下ながら助言を申し上げた。

2、部会での討論内容

熊谷ゼミからの質問状ではコミュニケーション能力とTOEICの関連性、面接で問われるプレゼン力とはどのような論文内容の確認、原発の福島のこれから、などの社会問題に照らしての質問や私が論文に照らした内容が経験上や親類の言葉であるがゆえにその情報の信頼性についてのご質問をいただいた。福島の問題に関しては都市部への福島の人々の流動化を促すか、スーパーなどの商品産業などを福島で展開していき、少しずつ復興につなげることなどの提案を申し上げた。また、内容の信頼性は親類の言葉や経験で私も確信しているからという事を理由に申し上げた。

3、ゼミナール大会で学んだこと

大会に参加して他の班の発表に驚愕した。次回の自分の発表でよりうまく発表できるように心掛ける上で参考になりそうなことを学べた。徹底した練習量、聞き取りやすい声、準備の整った時間管理などあらゆる面で勉強になった。次回の自分の発表に参考させてもらいたいものばかりでぜひ参考にさせていただきたいと思った。

1. 報告の要旨

私たちは、「音楽選好と心理状態の関連」についての研究を行った。松本論文(2002 年)の中に『人は悲しい時に悲しい音楽を聴くことで悲しい気持ちを和らげる』という効果があると証明されている。松山大学生でも同じ傾向があるか、更に悲しい時だけではなく、嬉しい時、恋愛した時、失恋した時でも違いは見られるのかについて、アンケート調査をした。アンケートから松山大学生は音楽に興味を持ち、日常的な音楽にあまり費用をかけないことがわかった。

また、気分一致効果という、気持ちと同じ音楽を聴くことで、気分を落ち着かせるという効果が働き、悲しい時は悲しい音楽を、嬉しい時は明るい音楽を選好するという結果が得られた。しかし、悲しい時と失恋した時は、明るい音楽を好む傾向も見られた。これは、若者は明るい音楽を聴くことで、悲しみを小さくさせる傾向があるからで、ディヴィット・J・ハーグリヴズとエイドリアン・C・ノースが 2004 年に証明している。

人が悲しい時に悲しい音楽を聴く理由として考えられるのは、音楽に共感を求めるからだ。誰も人には言えない悩みや苦しみが存在し、誰かに話したい願望はあっても共感を得られない、理解してくれないと思いつ込み、悩みを抱え込んでしまうことがある。その時に、自身の気持ちに近い音楽を聴き、共感してもらえたという満足を得る。そして、共感してくれる存在が出来たことで、悲しい、辛いという心理状態が楽になっていく。つまり、音楽は悲しい気持ちを洗い流してくれる場を提供してくれるのである。

2. 部会での討論内容

討論の場が設けられなかったため、この項目については書くことが出来ない。

3. ゼミナール大会で学んだこと

私たちがこの 1 年で学んだことは全体を観る視野の必要性である。

全体を観る視野とは 2 つに分けることが出来る。1 つ目は前を見据え、ゼミナール大会での報告のために計画を練る力のことだ。二つ目はチーム内の状態を把握できる力のことだ。グループ活動するには、予定を合わせて集まることと、相互理解を深めることが必要になる。予定を合わせないと話し合いは行えず、相互理解がなければ効率よく作業を進めることが出来ない。当初は作業効率が悪く、自分の任された作業に手いっぱい、周囲の状況を把握出来ずに作業していた。そのため、完全な分担作業に陥ってしまった。その時、私たちはしっかり話し合いせず、アンケートの作成を見切り発車で行ってしまった。結果、質問したら良かったことが後に出てきてしまった。チーム内の状態を把握できており、先を見据えていれば、チームでの役割を心懸けることが出来る。そして報告、連絡、相談に時間をかけて、満足のいくアンケートが出来ていたと思う。私たちはアンケートの失敗から全体を観る視野の必要性を学んだ。

1、報告の要旨

(自班)

掃除機の比較し、日本と海外の家電メーカーの違いを調べました。日本の家電メーカーがこれから更なる成長を遂げるためには、何が必要であるのかをまとめました。

まず、掃除機の歴史と種類など基本的なことから報告し、掃除機に興味を持ってもらうようにしました。

次に、掃除機を比較するために、異なるメーカーごとに商品の違いを見つけ出しました。そして、機能、価格、戦略での日本と海外メーカーの違いをまとめました。

さらに、家電市場全体を比べて、日本メーカーが海外メーカーに対してどのように劣っているのかを明確にしました。

以上のことをまとめて、これから日本の家電メーカーが海外に劣らない成長をするには、宣伝力の差を埋めることであるという結論を導き出しました。

2、部会での質疑応答内容

「日本と海外の家電メーカーについて比べるとあるが、対象を掃除機に限定した理由は何か」という質問に対して、「掃除機は誰にでもなじみ深く、絶対に知っている家電であるから、DysonのCMが印象強く、海外から日本に多く入ってきているイメージが強い家電であったから」と回答しました。

「技術力の日本、宣伝力の海外という論調であるが最後のまとめで両方伸ばせばいいとある。それにはどうすればよいと考えるか。また技術力や宣伝力以外の要素はないのか。」

という質問に対して、「どのように伸ばしていくかについては、第6章のまとめと第7章にある。技術力と宣伝力以外の要素については、生産方式の見直しや、労働コストの削減、新しい需要を生み出すことである。」と回答しました。

3、ゼミナール大会で学んだこと

このゼミナール大会に向けての約半年間の取り組みで、複数人で一つのものを作り出すことの難しさと良さを実感しました。協力、分担しての作業を円滑に行うことができました。また、いかに人に伝えるかが大事であると感じました。多大な時間と労力を使って準備をしても、本番で相手に伝わらなくては意味がありません。1人、飛び抜けて発表が上手な学生がいました。自分の言葉で、身近な例を挙げながら語りかけるように話していました。人を引きつけるものを感じました。声の大きさや抑揚、身振り手振りといった技術力もそうですが、何よりその内容について本当に伝えたいという気持ちが一番大切なのではないかと思いました。

伝える側としては、ゼミナール大会という限られた時間の中で、私たちが調べて得た知識をできる限り伝えようと努力しました。聞き手の理解を深めてもらうため、多くの知識量の中から伝えたいことだけに絞ることは本当に難しく、まとめるのに苦労しました。また自分たちのテーマをどういう結論に持っていくかには、各々がとても悩みました。柔軟な「発想力」また、多角的な視点による「気づき、発見」は、班結成当初の私たちにはあまりありませんでしたが、作成過程、論文の読み合せや、リハーサルを繰り返すことで、徐々に増えていくと同時に、これらの大切さをゼミナール大会で学ぶことができました。

熊谷ゼミ B 班は音楽選好と心理状態の関連について調べていました。音楽を聴くときの人とその音楽の明るさや暗さの違いについて調べていました。音楽が人の心理状態にもたらす効果がわかりやすくまとめられていました。

馬ゼミ C 班は社会に出て生きる大学時代の過ごし方・勉強法について調べていました。大学生活を過ごすうえで意識したら良いことなどをプレゼンしてくれました。細かく書けていたけれど、途中ですこし啓蒙的になっていました。

溝渕ゼミ C 班は携帯電話について調べていました。携帯電話と日本の総人口の比をあげ、飽和状態であることから携帯会社の乗り換え作戦について発表していました。途中で聴いている人に対して意見を求めていますすごいと思いました。松山大生にアンケート調査を行っていて、わかりやすかったです。

道下ゼミ C 班は家電 ～掃除機の比較～というタイトルで発表を行っていました。掃除機の機能を詳しく調べておりわかりやすかったです。

安田ゼミ C 班は“タダ”より高いものはない～無料サイトはどのように利益を得ているのか？～というタイトルの発表を行っていました。実際に存在するスマートフォンのアプリを例にあげ、具体的な広告収入を比較していました。

私たち柳原ゼミ B 班は生活保護の不正受給などの諸問題をなくすにはどのような対策が適切かという課題の元、一つの結論を立て、それに対していくつかの問題を項目として設定し、調べていきました。結論としては生活保護費の一部電子マネー化という方法で、調べたすべての問題の答えにはなったと思いますが、実施するためには時間とコストがかかりすぎ現実的ではなく、この問題の難しさを調べただけのような発表になってしまいました。結論や数字を交えて発表したため時間がとてもかかってしまいました。

大会が終わってみて、私はこの大会に意味があったのかなと考えてしまいました。というのも、私たちの班が一番大事な結論の部分を私一人が考え、いわゆる丸投げ状態になっていたからです。発表自体も聴いている人とそうでない人がいて、せっかく調べたことが無駄になっているのではないかと感じました。他の班の人の話を聞いていてもグループワークとは程遠い班が多く、少しは仕方がないと感じましたが、少数が苦労するだけの大会になってしまっていると思います。

【報告要旨】私たちは、無料アプリの収益方法について調べた。無料アプリの収益方法には、広告で収益を得るものや課金制度で得るものがあった。課金はもちろんだが、直接お金を儲けることより無料にし、ユーザーを増やすことが大切だということがわかった。みんなに知ってもらうことにより、広告料をあげたり、集客数を増やしたりすることにより売上を得ているのだと思う。いわば無料アプリは、企業が儲けるための一つの手段だと考えられる。それにダウンロードに時間がかかるが、一度ダウンロードすると通信環境に依存しないし、ホーム画面にアイコンが表示されるから利用しやすくリピータ率も高いのが強みだ。現実には90%を超える企業でまともに収益化できていない。それなのに何故、無料にするのかというと、これにはいろんな理由があるらしいが、共通しているのはユーザーを抱え込みたいからだということがわかった。そしてその裏には、その便利さや利用しやすさを利用した犯罪がたくさんあることもわかった。無料アプリを利用することによってストーカー被害や個人情報の流出などが起こっているそうだ。不正無料アプリは数えきれないほどたくさんあり、私たちが犯罪に巻き込まれる可能性もどんどん高くなっている。私たちの身近なところに犯罪は潜んでいるのだ。結論として、無料アプリにはLINEやSNSサイトを利用することによって起こるストーカー被害や個人情報の流出などがある。無料で利用しやすいが、問題点もたくさんある。アプリを利用する前に利用規約というものが出てくるが、これを読まずに同意するのではなく、しっかり読んでから利用することを勧める。SNSサイトを利用する場合は、自分の住んでいる地域や家族、学校、友達など自分の生活に関わることを書いたり、写真を掲載したりする場合は、個人が特定できないようにし、自分や他人の名前や住所、電話番号などを書いてはいけない。また、インターネットにはいろいろな情報が発信されている。その中には真実ではない情報もある。噂や憶測、評判などの風評に惑わされないように冷静に行動するべきだ。

【質疑応答】質疑応答に関しては、鋭い質問が多く、回答を考えるのに時間がかかった。論文上で細かい部分がなかなか調べられていなかったと思う。質問をされて、自分たちが気づかなかったことも学べて、視野を広げることができた。また私たちが他の班に対して質問したが、自分たちなりに調べた上で質問したため、知識が増えたと思う。なかなか鋭い質問ができたと感じている。

【学んだこと】学んだこととして、グループで集まって意見を出し合い、まとめることが難しかった。みんなの予定がなかなか合わず、集まれなかったが、1人1人が時間を調節し合い、忙しい中で何度も集まった。しかし数人で1つのものを作り上げることはとても困難だった。しかし、とてもいい経験になったと思う。論文やプレゼンテーションを作っていくうちに団結力が生まれ、最後には私たちに思っていたような発表ができたのではないかと感じている。

1 報告の要旨

私たちの班は、岬半島の柑橘農業の実態と課題について報告を行なった。鈴木ゼミでは、「農家元気応援隊」として高齢化の進む岬半島の柑橘農業を維持し、発展させるため活動を続けている。今回は農家の方たちに協力していただき、アンケート調査を行ない、その結果わかった柑橘農業の実態と課題について報告した。

アンケート調査では、農家の方の高齢化、後継者・人手不足、消費者とのネットワーク等について課題が見つかった。これらの課題の解決策は相互関連しており、農家の高齢化や後継者問題を阻止・解決するために、農業に関心のある若者を増やすことが必要である。就農者を多く確保できれば、これらの問題解消になり、人手不足も解消される。また、パソコン等を利用して情報発信をすることで、消費者とのネットワークの構築や、多くの人とのつながりを拡大することができる。

課題解決への具体策としては、農作業体験(インターンシップ)の受け入れや、後継者の発見・育成、消費者とのネットワークの構築、柑橘類のPR活動などを行ない、消費を拡大させること等がある。若者の農業への関心を高めることが特に大切である。

2 部会での討論内容

私たち第7グループの他の班では、食品産業、自然環境と経済活動、和食の歴史、再生可能エネルギーについての発表が行われた。再生可能エネルギーについては2つの班が発表しており、エネルギーの種類や、長所・短所等詳しく調べられていた。2011年3月11日に起きた東日本大震災により、人々の原発に対する不信感が高まっている。そこで注目され始めた再生可能エネルギーは、これから積極的に利用していく必要がある。今回の報告により、さまざまな発電について詳しく知ることができてよかった。

3 ゼミナール大会で学んだこと

他の5班の発表を聞いて、どこの班も詳しく調べていた。しかし、ただ内容を調べるだけでなく、実際に現地に自分たちの足を運んだり、自分たちでアンケートを実施し、その結果を発表したりするほうが、説得力もすごく大きくなると思った。ネットなどで調べることも一つの手段ではあるが、自分たちが直接見て感じたことのほうが、理解度も高く、発表を聞く人たちにも伝えやすいと思う。

発表に関しては、発表者が大切だとわかった。声の大きさはもちろんであるが、話すスピード、スライドと声が一致しているかなど、伝えるポイントとして、さまざまな工夫がある。また質問を受けた場合に、上手く説明できるかどうかについても、自信を持って答えることが大切である。他の班の1つには、原稿を持たず、常に前を見ながら、動作を加えて発表をしたグループもあった。そのような発表の仕方を参考にしたいと思う。

1. 報告の要旨

この論文の目的は、日本の経済状況がどのように産業に影響するかを確かめることだ。そこで、私たちにとって一番身近である食品産業に注目し考察した。

論点は、日本の食品産業がなぜ海外進出しているのかという点である。これを考察することにより、食品産業が海外進出している背景、目的、現状を知る。これらを通して、今の日本の食品産業の現状を知り、なぜ海外進出しているか、またどのように海外進出しているのかを事例研究を通して考察した。

この論文を通して、日本の経済状況が食品産業に与える影響について確認できた。少子高齢化や消費意欲の低下などの社会的要因を考慮すると、食品産業は海外に活路を求めていくべきだ。海外進出する方法としては M&A が主流である。販路拡大による安全管理体制の見直しや買収資金の高騰など留意する点もいくつかあるが、今後ますます食品産業は海外進出を行っていきだろうと予想する。

2. 部会での質疑応答・討論内容

Q1. 海外進出にあたって 海外で日本食が安全に思ってもらえるには。

徹底した安全管理と日本食が安全なことをアピールすることが大事だと考える。

Q2. 海外の食品（マクドナルド等）が日本の入ってくることによって習慣や風習にまつわるデメリットをあげてほしい。

マクドナルドなどが日本に参入してきたことにより、スローフードからファストフードを好む人が多くなった。それにより、家族が集まって食事をするという時間が少なくなり、家族内でコミュニケーションをとる時間が減ったことがデメリットのうちの 1 つだと考える。

Q3. 家計消費支出が 2000 年代になって横ばいとあり、たばこを含む飲食費の減少があるが、その代わりにどの分野が増加したのか。

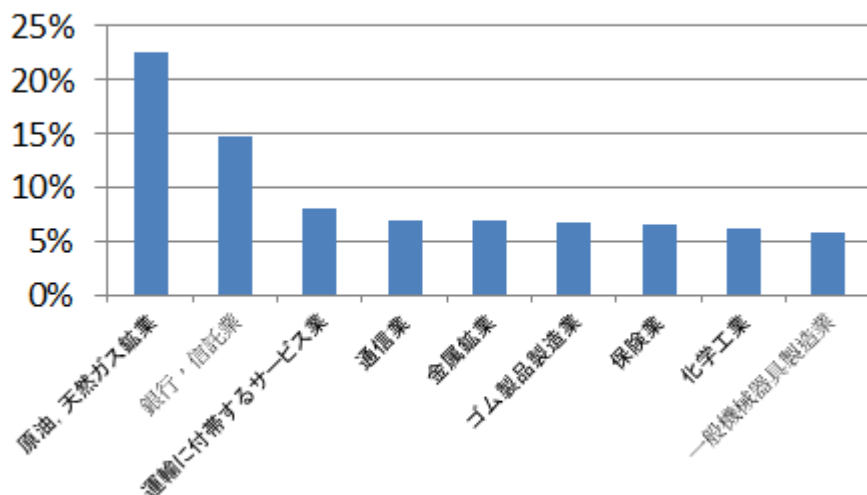
飲食費が減少したからといって他の分野が増加した訳ではない。景気悪化により家計の支出が減少したのみという形になっている。

Q4. 日本から海外の M&A はあるが、海外から日本に M&A した企業はあるのか。

2007 年に三星食品が英国大手菓子メーカーのキャドバリー・シュウエップスによる買収を受け入れ話題となった。日本の食品市場の成長鈍化を考えれば、今後の日本企業に対する M&A の増加はあまりないと予想される。

Q5. 食品メーカー全体の利益率・営業利益率はわかったが、13 分野の利益と営業利益率を具体的な数値を出してほしい。

売上経常利益率 上位10社 11/27日付



参照: EDUNET 業種平均ランキング

上記は 2013 年 11 月 27 日付けの売上経常利益率上位 10 業種のグラフである。1 番の原油・天然ガス鉱業の営業利益率が 20%を超えていることを考えると、いかに食品メーカーの営業利益率が低いかうかがえる。

Q6. 冒頭部分 サントリー等大規模企業のみならず、中小食品産業も海外進出していて、大企業と同じような流れを取っているのか。

中小企業も海外進出を積極的に行う傾向が強まっている。

Q7. 食品加工業者の歴史 一番に海外進出した企業はどこで、成功したかどうか。

おそらく味の素だと思われる。海外進出の歴史は古く、台湾に進出した 1910 年までさかのぼる。味の素の製品が、100 カ国を超える国々で販売されていることを考えたら、海外で成功していると言えるだろう。

Q8. 海外から来た食品産業で日本に定着したもの

コカ・コーラやペプシコなどがあげられる。

3. ゼミナール大会で学んだこと

リーダーシップの重要さである。私たち道下ゼミは 1 グループ 5 名である。資料集め 2 名、論文 1 名、パワーポイント作成 1 名、発表者 1 名と役割分担があった。私は資料集め兼リーダーであったので、各自がそれぞれの役割をしっかりと果たせるようにしようと意識した。しかし、最初はそれが上手くいかなかった。各自が役割をしっかりと意識できていなかったことと、私の指示不足が原因である。そこで、私は他の役割を果たし、手本を見せることで各々の役割意識をはっきりさせるようにした。すると、各自が仕事を進んでしてくれるようになった。また、私自身が他の役割を経験しているので具体的な指示も与えやすくなり、論文作成が滞ることなく進んだ。各々が仕事をきちんと果たせるようにするのは、リーダーの責任であると考え。そのためには、各役割をしっかりと理解し、適切な指示を与えることが重要であることを学んだ。

1、報告の要旨

松井ゼミの報告は、演習第Ⅱが始まっての7か月間の東温市河之内でお米作りをしてきて、そこから学んだことを報告した。里山は農業のみならず、国際、経済、生活、環境、生物、政治問題等さまざまなことを学べる総合学という視点からみて、その中の、国際、経済、環境、ライフサイクルマネジメントの4つの視点を中心に据えて行った。

まずは実際の活動を通して、お米の生産にかかるコストについて触れて原価は1kgあたり2181円ではあるが、市場を考慮すると売れないとなり、労働費用を0にすることによって、1500円で実際に売ってみるものの、学祭では売れずにもう1度話し合い、1000円の価格で販売することになった。農家の厳しい金銭問題について触れてみた。そこから耕作放棄について触れて、現在農家の抱える問題をあげ、TPPへとバトンを渡した。TPPは賛成反対意見の両方があり、国際問題も大きくからんでいる。そこで、外国と日本の農業の際について触れて、日本の地理的ふりを検証してみた。その中から日本の農業が生き残っていく方策についてを考察し、農業の6次産業化、IT化が上がった。

そして、最後に私たちの生活に密接に関わってくるお米に関する食育について触れて、ライフサイクルマネジメントにも言及してみた。生まれた時から死ぬまで、食は人と切っても切り離せないなので、お米食がいかにバランスを取れて、健康的な食事をとれるかを述べた。食育によりお米食文化を見直し、お米の生産量が上がり、生活習慣病にかかりにくくなるうえ政府倉庫の貯蓄米も減少していくので、税金の無駄削減にもつながる。

結論としては、4つの視点から見て、里山を観光地化する。日々食べている食卓から農業問題からさまざまなことに思いをはせてみる。食育を通してお米の生産量をあげていく。農業の6次産業化を図る。TPPについてよく考えてみる。以上5点が上がった。

2、部会での質疑応答・討議内容

渡辺ゼミからの質問

① 現在の過度な保護主義が指しているのは何か？

→減反政策+高関税による高価格政策のことです。

② 海外の国土は広い→海外ではどこの国を考えていますかに関して

→アメリカやフランスのことで、国土ではなく耕作地の面積が広いということです。論文の中で国土と書いていたのは訂正します。日本は山が多く平らな地面が少ないといったことをお願いします。

③ 農業にITを取り入れるとあるが、その費用はどれくらいかに関して

→ITを取り入れる費用は中規模農家で120万円、大規模農家で約1000万円かかります。取り入れる機材や種類によっては費用が変わってきます。中規模農家はトマト・イチゴ農園で、大規模農家は徳島の上勝町で行われています。

④ グラノーラとは

→コーンフレークなどのことです。

3、ゼミ大会で学んだこと

お米作りだけでも幅広い分野のことが学べることを学びました。

1. 論文要旨

昨年西洋の食文化を調べたのを受けて、今年日本の食文化について調べた。

縄文時代については、当時日本人のほとんどが東日本に住んでいたと知ったのが発見だった。ところが、弥生時代から古代に大陸から水田稲作が伝わり西日本の人口が急増した。全人口に占める西日本の人口は、縄文時代はわずか4%だったが、弥生時代には60%になったのである。

鎌倉時代から安土桃山時代については、まず1日3食食べる習慣が戦^{いくさ}から来ていると知った。室町時代には、米、野菜、魚中心の和食文化の基本ができ、本膳料理が確立された。江戸時代は、時々時代劇などで見るが、幕府が置かれるまで江戸つまり今の東京は寒村だったこと、だから調味料の生産なども未発達で、よい品は先進地域である関西から江戸に送られた（これを江戸に「くだ^{くだ}る」と言った）こと、関東産の物はそれができないから「下らない」品と呼ばれたことなどが面白かった。

明治時代から戦前の昭和までは、やはり文明開化と洋食の普及がメインテーマである。日本人は新しい物が好きだから、洋食に注目が集まったのだろうが、普及は東京などの大都市に限定されただろう。これに対して戦後の昭和時代には、洋食は日本中に広まった。それだけでなく、タイ料理などエスニック料理も普及しつつある。つまり、日本の食糧事情は格段に豊かになった。しかしその反面で、レトルト食品や冷凍食品が普及して「わが家の味」というものが消えつつあることが問題だ。また、輸入野菜の急増などが安全性の危機をもたらしかねないことも問題である。平成に入ってからの特徴に、日本食の世界的なブームがある。「スシ・バー」などが世界各地にできているし、有名なミシュランのレストランガイドでは、東京にパリを上回る高評価がつけられた。日本食は、世界に誇りうるものの地位を固めつつある。

2. 討論内容

部会で討論されることはなかった。質問が7つほど出されたが、最初の部分に集中していて、終わりまで読む労力を省いた気配が強かった。

3. 学んだこと

- ・もう少し話し方等を工夫すれば、言いたいことがもっとよく伝わっただろうと思った。(西村)(神内)
- ・どのゼミも工夫されていて、ためになった。(中村)
- ・プレゼンの上手いゼミを見られて、参考になった。(田中)
- ・他のゼミの発表を聞くことで、プレゼンがどうであるべきか分かった。(水野)
- ・大変興味深い機会だった。今回得た経験を、社会人になっても活かしていきたい。(岡田)(別役)
- ・他のゼミもよく調べていたので、聞いていてためになった。(近藤)(渡部)

報告論文の要旨

テーマは再生可能エネルギーとその企業。

東日本大震災により、人々の原発に対する不信感が高まった。それに代わるエネルギーとして今後必要になってくるのが再生可能エネルギーである。そこで、私たちの論文ではそれぞれの再生可能エネルギーの特徴、メリット、デメリット、それに関連する企業について調べ、まとめた。

今回取り上げた再生可能エネルギーは、太陽光、風力、バイオマス、地熱、小水力、海洋である。太陽光発電は太陽電池と呼ばれる装置を用いて、太陽の光エネルギーを直接電気に変換する発電方式である。メリットとして挙げられるのはクリーンで枯渇がないということ、設置場所を選ばないということが挙げられる。一方デメリットは発電コストが高いことなどが挙げられる。太陽光発電に参入しているメーカーは東芝があり、高い発電効率を実現するバックコンタクト方式を採用している。企業は日々研究を重ね、他社と競争することによって再生可能エネルギーの分野は発達していくのである。

その他、風力、バイオマス、地熱、小水力、海洋についても同じように調べてまとめ、発表した。

質問状とそれに対する回答

質問 1. 再生可能エネルギーについて、特徴・メリットとデメリットが述べられているが、著者が一番期待している発電方法は何か、またその理由を教えてください。

回答 期待しているのは太陽光発電です。太陽エネルギーを使用するのでももちろん枯渇することはないですし、かつて日本が世界トップのシェアを誇っていた分野です。また、他の再生可能エネルギーと違い、一般家庭にも設置できるという点は大きいと思います。ネックである発電コストも技術開発によって下がることが見込まれています。

質問 2 新エネルギーと再生可能エネルギーの違いは何か

回答 再生可能エネルギーとは、名前の通り再生が可能なエネルギーのことです。半永久的に利用ができるのが特徴で、具体的には、風力、太陽光、水力、バイオマス、波力などが該当します。

一方、新エネルギーとは一般に日本の資源エネルギー庁によって定義されるエネルギーのことを指します。

ゼミナール大会に参加して得たこと

普段あのような大人数の前で発表するということが少ないので貴重な経験になった。また、再生可能エネルギーのことを今まで以上に詳しく知ることができ、各発電の特徴やこれから普及するにあたっての課題がわかった。ほかのゼミの発表も聞くことができ、様々なテーマがあって面白かった。

1. 論文の目的と主な内容

ゼミナール大会で、今後の再生可能エネルギー政策の可能性を探ってみるとともに、2012年7月に導入した固定価格買い取り制度（Feed in Tariff, FIT）などの促進制度の問題点と改善策を提案した。2011年3月の福島第一原発事故で放射能のみならず、大規模かつ集中型電源の潜在的なリスクを再認識することになった。電力供給能力の不足を補うための節電やそれを促すためのインセンティブ制度も導入された。しかし、根本的な解決のために分散型の再生可能エネルギーの積極的な導入が求められ、その促進策としてFIT制度が導入されたのである。FIT制度は、電力会社に固定価格で義務的な購入を強制するため、建設者側には安定した収益が保障される。

したがって、従来のRPS法と違って、FIT制度の導入で急激な再生可能エネルギーの導入が進んでいるが、1) 料金の高い「太陽光」に集中されていること、2) 風力が進められている北海道をはじめとする東北地方で送電能力の不足問題、3) 東西の周波数変換能力の問題、などが浮彫になった。こうした問題を解決するためには、太陽光発電の料金を生産単価に連動させること、政府が送電網および変換施設の増大に財政支援を行うことが求められる。

2. 大会での質疑

鈴木ゼミから七つの質問では、再生可能エネルギーの中で最も望ましいと思うエネルギーが何かに対する理由を説明することと、伊方原発の再稼働に関する意見が求められた。しかし、自分の主張を論理的に裏つける知識不足で、先方の十分な理解を得る答えができなかったと思える。しかも、論文でも不明でかつあいまいな部分があったと反省している。

3. 大会で学んだことを生かす

大学生活で初めて壇上からの発表を通じて、自分の脆弱点を多く見出しその改善のために必死に努力しなければならないと思った。とくに、緊張のため癖の早口になってしまい、演習よりうまく説明ができなかった。なお、他のグループの発表方法からも学ぶものが多かった。例えば、他のグループはパワーポイントで図や表も大きくするなど、聞き手の立場に十分に配慮したものであった。

人を説得するために、パワーポイントを効果的に使うことや、声の張り具合・強弱・スピードを意識して、社会でのプレゼンテーションの機会に今回の経験を生かしていきたいと思う。

1、報告の趣旨

松浦ゼミC班は、東京ディズニーランドの経営戦略について発表した。

東京ディズニーランドは今年30周年にかかわらず、顧客のリピート率が90%以上保ち続けることが可能なのか。私たちは調査することにした。

第一章では、ディズニーの歴史を振り返りながらディズニーについて説明し、創始者であるウォルト氏の意味も説明している。また、ディズニーランドの細かな違いや、収益についてもここで説明している。

第二章では、ディズニーの経営理念である行動指針、SCSEについてポイントごとに説明している。また、SCSEを基礎とした思いやりのあるある行動、ホスピタリティについてもここで説明している。

第三章では、従業員の徹底した教育について書いた。9割がアルバイトにもかかわらずなぜやっていけるかなど、また、ここでは従業員の給与も説明している。

あとがきでは、これまでの考察から、ディズニーでは世界でも有数の大企業ではないだろうかと考えられる。

2、部会での質疑応答、討論内容

Q、ディズニー・パークとは一体どのようなものか、詳しく説明してください。

A、アメリカにあるウォルト・ディズニー・カンパニーというエンターテイメント会社(主に映画などを製作している会社)であるディズニーが展開しているディズニー作品等をテーマとしたテーマパークの総称である。

Q、アルバイトにとってユニバーシティ・リーダーになることでメリットはあるか

A、厳しい訓練や研修を受けることで自分自身を磨き、成長させることができ、また、優秀な社員として会社側からも必要とされる人材になることができる、ということ。

Qなぜ年間退職者が9,000人なのか

A、私たちの班の勝手な推測だが、一つはアルバイトの低賃金の問題があげられる。ディズニーだから楽しいところである、と思って入る人が多く、実際の業務内容は厳しく過酷なうえ低賃金なので辞める割合が多い。二つ目は、高校生アルバイトの多さ。高校生は進学の関係などで長くて3年、短くて1年あるいはそれ以下になってしまい、短期的に働いているので、それも要因の一つであると考えられる。

3、ゼミナール大会で学んだこと、感想

様々な種類の報告があり、自分たちの知らなかったことが多く、発見できたことも多かった。また、自分たちと似たテーマについての報告があり、別の視点からの報告だったので自分たちとはまた違った見方もあることを学んだ。

1 報告の要旨

東京ディズニーリゾートがなぜ人気なのか。この疑問を明らかにするために、SWOT 分析で現状を把握し、課題解決策を提案した。その解決策は(1) キャラクターの人気の高さや、映画や音楽の利用で競争優位性をさらに高める(2) クオリティの高いサービスをさらに高める(3) アイドルとコラボする(4) 仕事に合った給与、実績に見合った昇給の4つである。

2 部会での質疑応答・討論内容

● クオリティの高いサービスの根拠は何か。

SCSE という行動指針をキャストが徹底的にすることで、キャスト一人ひとりの意識を高めることができ、ゲストに最大限に満足してもらえるサービスができている。日本の多くのテーマパークがリピーターを確保できずにいるのに対し、東京ディズニーリゾートのリピーター率は97%を誇っている。これを達成することができたのは、ゲストを満足させることができるサービス力を東京ディズニーリゾートのキャストが持っていたからである。

● 提案したツアーは1グループに1キャストの方がより安全性が高まるのではないか。

私たちはあえてゲストの数を増やしキャストを3人にする一方で、さらにキャストの教育にもつながると考えた。1人のキャストが先頭に立ち、グループ全体を案内していく、そして、残り2人のキャストが後方からゲストに危険がないか目を見張る。これにより安全性は問題無いといえる。また、キャストがグループを楽しませることができるよう工夫して案内し、後ろから見ている他のキャストが後から気づいたことを注意することで、キャストの成長につながるだろう。

3 ゼミナール大会で学んだこと

ゼミナール大会を通して、グループで協力することの大切さを学んだ。最初は、人任せで自ら進んで行動する人がいなかったが、自分たちの成長につなげるために個人個人が集まる時間に遅刻せず集まる、自分が担当する部分を自分たちが決めた期限内にしっかりやり遂げるなど責任を持って行動するようになった。また、Powerpoint の作成においては見やすいスライドを意識し、1枚のスライドに文字を入れ過ぎないことや効果的なアニメーションの付け方、ディズニーの画像を入れることで見ている人が楽しく思えるような工夫をした。普段のゼミ活動では、他のグループの研究成果や本番に向けてのプレゼンを聞き、自分の感じたこと、疑問に思ったことを積極的に発言することで、どんな場面でも自分の意見が言える発信力を身に付けた。私たちは発表の練習の時間を十分に確保できず、ゼミナール大会では全員が緊張し、本来伝えるべきことをしっかりと伝えることができなかった。このことにより、事前にしっかりと計画を立てておくことと、いくら研究内容が良くてもそれを言葉にして人に上手く伝えることが難しいということも学んだ。

私たちは、「旅行と経済学」というテーマでゼミナール大会に挑んだ。松山大学の学生が旅行で、愛媛から大阪に行くのには、どのくらいの価値があるのかということをもとめた。まず、最初に松山大学の学生男女300人にアンケートをとった。講義の時に先生方に許可を取り、アンケートをとらせてもらった。また、自らカルフルを訪れ、様々な学部、学年の生徒にアンケートをとった。その後、300枚のアンケート結果をまとめ、分析をした。

プレゼンの内容は、まず初めに大阪を簡単に紹介し、魅力ある場所だと伝えた。次に、トービットモデルを用いて結果を客観的に分析した。トービットモデルを使用し、分かったことは、大阪に関しては、男性よりも女性の方が多く大阪を訪れていることや、滞在日数が長い人ほど多く大阪を訪れていることなどたくさん分かった。アンケート結果から「旅行前に計画していた金額よりも、多くのお金を使ってしまう」という、回答が多かったため、その原因も追究した。その原因とは、当たり前のことだが、お金を多く持っている人ほど大きなずれが生じることが分かった。また、滞在日数が長ければ長いほど、ずれが大きくなることも分かった。これらのことを踏まえて、トラベルコスト法で愛媛から大阪に行くのには、どのくらいの価値（いくらまで支払えるのか）ということをもとめた。結果は、約12000円だった。このような流れで、プレゼンを発表した。

発表後の質疑応答では3つの質問に回答した。まず1つ目がトラベルコスト法を分かりやすく説明してください、という質問だった。この質問に関しては、機会費用（旅行中に稼げないお金）と必要費用（交通費、宿泊費、入場料など）を組み合わせて、説明をした。2つ目の質問は、東京ではなく、大阪を選んだ理由はなぜですか、だった。日本の都市は東京だが、愛媛の学生が旅行に訪れるとなると、移動時間、交通費などを考えると大阪のほうが東京よりも訪れていると推測したと答えた。最後の質問は、大阪でしかアンケートをとっていないにも関わらず、どうして男性よりも女性のほうが旅行に興味関心があるといえるのか、だった。この質問に関しては、大阪だけでいえることだと回答をした。

このゼミナール大会を通じて学んだことは多くある。特に思ったことが、1人の力では成り立たないということだ。皆で協力できたからこそ、大変なことも乗り越えることができ、本番で成功することができた。どんなに素晴らしい論文やプレゼンができて、発表者がしっかりしていないと、全てが台無しになることもわかった。ジェスチャーなどを交えることが大事だと思った。最後に、旅行とは行っているときにだけ価値があるのではなく、旅行を終えてからも価値がある。それは、思い出話をしたり、写真を見返すことで、一生心の中に思い出として残るからだ。このことを通じて、旅行とは改めて素晴らしいと思った。

I 報告の要旨

私たちの班では、安倍政権が打ち出した経済政策「アベノミクス」によって、少しずつ回復しているという日本経済だが、本当に今のままの政策で良いのかと疑問に感じていた。そこで、今のままでは若者が押しつぶされていく社会になるのではないかという視点からと大都市中心の政策になっているのではという視点から学生目線で、もう一度検討したいと考えた。現在のアベノミクスの概要を踏まえ、また、批判するだけでなく、学生目線からアベノミクスに新たな提案をしていった。

その結果、アベノミクスの政策にはまだまだ問題があると分かった。若者と老人、地方と大都市、すべてがうまくいく政策などはない。しかしながら、格差を最小限にまでとどめる努力は必要であり、今の政策のままでは格差はひらいていってしまうと考えた。

そして、私たちは学生目線からアベノミクスに新たな提案をした。年金制度は簡単には変えられるものではなく、少子化、介護の問題もそうすぐには解決しないが、新しいものをつくるという明るい話題をだすことで、若者が、日本が、夢や希望を持つことができるのではないかと考え、日本全体が再興していくためにも、大都市だけでなく、地方にも目を向けてもらいたい。だからこそ、四国に新幹線を引き、聖地巡礼をきっかけに地域の魅力を発見してもらおうと提案した。観光は経済活性化の起爆剤になれる。そして、聖地巡礼は様々な地域で適用できると考えた。

一方だけに偏った経済政策では、本当の意味での日本再興はできないのではないだろう。最大限の人にアベノミクスの恩恵を受けられるような政策が必要である。今、もう一度アベノミクスの政策を見直すべきではないかと私たちは考えた。

II 部会での質疑・応答

①金融緩和は白川元総裁の時から行われていたのにも関わらず、十分な効果が出なかったのはなぜか？

⇒黒田総裁と比べて白川元総裁は金融緩和に積極的ではなく、人々に期待をもたせるような金融緩和の仕方ではなかったから。

②アベノミクスによって恩恵を受けるのは一部の大企業といわれているが、中小企業に効果が出るのはいつごろか？

⇒大企業の工場ラインで使われる部品を作る一部の中小企業では効果が出始めているものの、中小企業に対する成長戦略が不十分なため、効果が出始めるのはまだ時間がかかると考える。

③2014年4月から社会保障を充実させるために消費税を8%にすることとなり、より若者にとって負担が増える中、若者に対してどのような政策を行うべきか？

⇒正規雇用での就労確保の規模を拡大させることや、または専門的技術者の育成に国が支援していけたらよいのではと考える。

④日本がスウェーデンの少子化対策を行えない根本的な原因はどこにあるのか？また日本は少子化問題をどう解決していくべきか？

⇒日本の育児は女性が中心のため。欧米に比べて男性の育児参加時間が短いのが原因である。そのためには女性の育児負担をへらすための制度を作ること、子供がいる世帯には税制負担を軽くするなどの対策が必要ではないかと考える。

⑤大都市中心の政策を地方中心の政策に転換するために地方自治体でなにを考えておく必要があるか？

⇒アベノミクスは国が行う政策であり、地方自治体が行う政策ではないが、国が地方中心の政策を出したとき、地方自治体もきちんとその政策を受け入れていく体制を作ること重要ではないかと考える。

III ゼミナール大会で学んだこと

2万字という論文をグループのみんなと作り上げるというのは、最初出来上がるか不安でしたが、やってみて自分だけで作る論文とはまた違う、中身の濃いものを作り上げることができた。また他の班の論文も聞いていて良い情報交換の場になり、とても有意義だった。

- 報告の要旨：安田ゼミB班は「スマホとアプリ開発」についての報告をした。アプリ開発をする上で今までの情報の入手方法についていくつかの例をあげると、「松山大学HP・学内専用メニュー・Text-it・シラバス・学内ポータル」など挙げていくとたくさんある。それを上手く1回生の時から使用できる人はそう多くないことを述べつつも従来の情報入手手段についてのメリット・デメリットを報告した。メリットとして、正確な情報の獲得ができることができる。デメリットとして、情報選別に時間がかかる、携帯で確認できないものがある。情報が拡散しているなどを挙げる事が出来る。私たちの意見は述べたが、学生自身はどう考えているのか、学生自身が必要としている情報は何かを中心にアンケートをとり、結果を報告した。学生自身が求めていることを学年別にみると、1、2回生は講義や試験内容など単位に関わる情報を求めているのに対して、3、4回生は就職活動に関係するガイダンスや合同説明会などの日程を詳しく情報として発信して欲しいという提言がなされたと報告した。これらをふまえて私たち自身がアプリとして何の情報を発信していくのかをまとめ、他のゼミの人達と共有した。アプリ開発環境の説明に関しては手短かにまとめ、具体的にどのようなことが出来るのかとしてカレンダーを作成し進捗状況を報告した。
- 部会内での質疑応答：私たちの班は、質問状に寄せられた質問はあったもののゼミナール大会で報告した内容に対しての質問はなかった。これは単に報告内容が良かったのか、理解できずに質問が浮かんでこなかったのか分かり兼ねる。他の3つの班の報告内容に多くの質問が飛び交っていたことも関係するのではないかと考える。私たちの班の質問状には、「全ての情報がアプリ内で閲覧出来るなら講義に出席しなくてもいいのでは?」、「アプリ内でのセキュリティ面の問題解決はどうするのか?」、「アプリを見た後にHPなどを確認するなら二度手間ではないのか?」と言った質問が寄せられた。私たちが考えているアプリは、全てを叶えるわけではなく1つのツールとして活用し、またLINEなどで活用された1度のセキュリティ認証によって時間の短縮を図るものである。情報の信憑性は各人が自己責任で判断してもらおうと同時に、情報が溢れている世の中に自分で情報を選別できる力を身に付けてもらいたかったというのもある。このアプリを「日常の一部」として活用してもらいたかったのである。
- 学んだこと：このゼミナール大会を通して学んだことは、準備がいかに重要であるかということだ。開始時期が遅れてしまうことはあるものの、どう時間を有効活用するかで報告をいくらでも変えることができたはずだ。しかし、開始時刻に全員で集合せず話し合いをしない、集まったとしてもただだと時間を過ごしてしまった。これでは報告の質が大きく損なわれることは理解していた。確かに、抽象的なタイトルもあってなかなか行動に移すことができなかった部分はある。しかし、それを言い訳としては本末転倒であるので、今後の生活でも準備と報告という機会は必ず訪れると思うのでそういった時に準備を早く取り掛かれるように心がけたいと学ぶことができた。

報告の要旨

サブプライムローンの実態を表グラフを用いて説明する。

部会での質疑応答

Q. 投資銀行の起源はイギリスのマーチャントバンクであるが、日本最初の投資銀行はどこか？

A. 日本に投資銀行は存在しないが、野村証券をはじめとする証券会社が投資銀行業務を担っていた。

Q. アメリカには具体的にどんな格付け会社があるのか？

A. 有名などころでは、ムーディーズ、S&P、フィッチ・レーティングスが挙げられる。

Q. どのようにして格付けを行うのか？

A. 個々の債券に対する信用格付けはあくまで「債務の履行能力」を評価している。

ゼミナール大会で学んだこと

大学の授業では、学んだことを何か形に残すということがなかったので今回のゼミナール大会でプレゼンという形で学習内容を形に残せたので、とても達成感がありました。

また、プレゼンの作り方を学ぶこともできました

何度か先生からプレゼンの作り方について、指導していただくこともありましたが、そのお蔭でプレゼンの作り方を理解することができたと思います。そして、プレゼン作成におけるデーターの重要性についても学ぶことができました。説得力を持たせるためにも、データーという根拠を元にプレゼンを行うことはとても重要であると感じました。

1. 報告の要旨

私の班では模型小売店の生き残り戦略についてまとめ上げ、発表することになった。残念ながら、詳細な数値のデータは一企業としては晒すことは危険なことであるため、模型店の利益や損失などの詳しい数値の協力は得ることができなかった。

そこで、私は松山市内の模型店にて2年以上アルバイトをしていたため、その経験を生かした分析に基づいた構成をとることにした。また、数値の協力は得る事ができなかったが、小売店の案内のチラシや詳しい商品説明のチラシなどをいただくことができたのでそれも活用することができた。数値による綿密な構成にならなかった分、写真やチラシなど手に取りやすい資料、パワーポイントが用意できたのは視聴してもらった人には分かりやすいものになったはずである。

2. 部会での討論内容

当日の参加者からの質問がなかったので、私の班には事前に頂いていた質問のみ答えることとなったが、これらもパワーポイントを使い分かりやすい説明ができた。

例えば模型店に女性のお客さんを取り込むためにはどういった対策があるかという質問に対しては模型店から頂いていた資料をプリンタで読み込み、パワーポイントで拡大表示しながら例を示す、と言った具合に質疑応答することができた。当日質問があればそれにも具体例を示しながら応答したかったのだが、質問自体がなかったのでその必要はなかった。

3. ゼミナール大会で学んだこと

今回のゼミナール大会、私は1人だけですべての作業を行った。また部会長も兼任することになり、ゼミナール大会の前日まで非常に忙しく、また厳しい日程となった。そのため他の班長との連絡のやり取りが非常に大切なものとなった。幸い提出が必要な資料などの期限に遅れることもなく、部会長としては問題はなかったのではないかと考えている。分からないことがあった場合も事務局の溝渕先生に丁寧に対応してもらえたので困ったこともすぐに解決することができた。おかげで負担も確かにあったが私は自分の作業に集中する時間もとることができた。今後も何かの作業で代表となったり、困ることができるかもしれないがそういったときには今回の経験を生かして取り組むようにしていきたい。

1. 報告の要旨

私達の班では、いくつかの宣伝媒体を組み合わせその宣伝効果を最大化する「クロスメディア」について報告した。プレゼンでは、①クロスメディアが確立するまで、②クロスメディアの具体的な効果③これからの課題・展望と大きく3つに分け、クロスメディアの概要と具体例を紹介し、その有用性について述べた。

2. 部会での質疑応答・討論内容

私たちの報告について、高齢者向けの商品ではどのような媒体のクロスが適当か。また、報告の中にある「検索連動型広告」とは何か。についての質疑があった。そこで私たちは、70代のメディアの利用率のグラフを紹介し、その中で利用率の高いテレビと新聞を組み合わせるのが最適であると回答した。また、「検索連動型広告」では、実際の画像を提示しながらその広告宣伝について説明した。

3. ゼミナール大会で学んだこと

私たちは、今回広告戦略について研究した。広告戦略というものは日々変容しており、現在注目されている戦略を理解するとともに、これからも注目し継続的に研究していくことが重要であると学習した。またグループで活動することの楽しさや、一つの課題を成し終えたときの達成感、一方でグループ活動の難しさなども今回のゼミ大会を通じて学ぶことができた。

1. 報告要旨

安田ゼミ A 班は、「スマホアプリでの儲け方」の論文の報告を行った。問題意識は「企業はどのようにして利益を得ているのか？」と「儲かっているのなら私たちにも可能なのか？」である。まず、企業がアプリによって儲けているのかどうかについては、「LINE」と「Facebook」を例に取り上げ、儲かっているのか調べた。なお、Facebook は莫大な利益を得ているが、LINE は利益をあげられていなかった。また、アプリで収益を得る仕組みを紹介した。LINE はアプリ内課金など、Facebook は広告収入などで収益を得ていることを取り上げて、二つのアプリは違う構造となっていることを説明した。次に、私たちにもアプリ開発で儲けることができるのかの発表をした。個人でのアプリ開発は、困難であるが可能であり、企業のように儲かるアプリと儲からないアプリがあった。そこで、儲かるアプリとはどのようなものかを考えた。「多くダウンロードされる」、「頻繁に使用される」アプリは多くの利益を得る。よって、アプリの作成はそれらを考慮することが必要である。また、それぞれのアプリに適した収益の得かたを選ぶことや、広告・宣伝でアプリを認知してもらうことが必要である。アプリ開発で生活している個人のインタビュー記事の例を取り上げた。「RucKyGAMES」という二人組で活動しているようで、無料アプリの広告掲載で収益を得ているとのことだった。月収はサラリーマン程度ということで、個人のアプリ開発でも生活することが可能であるとした。

2. 質疑応答

私たちは、宮本ゼミ C 班に対して質疑を行った。内容は、高齢者向けのクロスメディア戦略はどのようなメディアの組み合わせが良いかと、論文中の検索運動型広告とは何か聞いた。高齢者向けのクロスメディア戦略は、新聞とテレビ CM を使うのが良いといった回答をいただいた。また、検索運動型広告とは、Google や Yahoo などのサイトで検索を行ったときに、検索結果の右側などに表示される広告である。検索されたワードに関連性の高いものや、そのワードを検索する可能性の高い年代にターゲットを絞ったものようだ。

次に、私たちは間宮ゼミ C 班から質疑をいただいた。まず、スマホの普及率を 100% にすれば、市場規模はさらに拡大するのか。100% にすれば、市場は拡大するが、普及率 100% は現実的ではない。次に、アプリ開発のコストはかかるのかという質問に対しては、個人で自ら開発する場合も、企業に依頼する場合もコストは必要なことを伝えた。個人で開発する場合に利益を出せるかどうかは、上記の通りである。

3. 学んだこと

この大会を通して、たくさんの経験をする事ができた。その中でも特に、「伝えたいことをはっきりすること」と「チームワーク」が重要だと感じた。まず、私たちの論文は、伝えたいことがはっきりしないまま提出することとなってしまった。そのため、理解のしにくいものとなってしまった。きちんと主題を整理して、相手に伝えることが重要だと感じた。次に、グループでの活動時間が少なく、内容が薄いものとなってしまったことだ。また、個別で決められた範囲の論文を書いたことで、内容の一貫性がなくなってしまった。グループワークの重要性を改めて感じた。

1. 研究テーマは「アベノミクスによる公共事業への約5兆円もの投資の経済波及効果を分析する」というものだった。一章では、アベノミクスについて触れ、二章では、1980年と2000年の産業連関表を用い、過去より現在のほうが経済波及効果は薄れているという仮説を検証した。結果は経済面と雇用面からみても薄れていることが分かった。このことをふまえ三章では、よりよい投資（税金）の使い道について考えた。比較した部門は「教育・研究」「公共事業」「医療・保険・社会保障・介護」であり、結果は総効果、「公共事業」「医療・保険・社会保障・介護」「教育・研究」の順であった。一方GDP増加額は「教育・研究」「医療・保険・社会保障・介護」「公共事業」の順であった。このことから考えると、教育・研究がより良い税金の使い方だといえる。このことを活かし発展的な内容として、投資削減可能額、あるいは前年より15.6%増加した公共事業への投資額を、教育・研究に入れたときのGDP増加額、就業者・雇用者増加数などを算出することができた。

2. 1. 「なぜ公共事業の効果は、薄れたのか」：二次産業の色が強い公共事業には不都合な産業構造の変化と、人材より大きな機械を使い始めた時代の流れが原因。
2. 「質問1に関しての雇用面」：バブル崩壊からの不景気は脱出したものの、労働者にはその分配がない上、終身雇用制度は崩壊し、契約社員や派遣社員などの非正規雇用社員が増加したことで労働市場の流動化が進んだから。
3. 「農林水産業などの波及効果の背景に食料自給率の低下があるのはなぜか」：海外からの輸入品に依存すれば、当然国内生産物の需要は低下し、生産量は減少するから。
4. 「1,2次産業が衰退し、3次産業が成長した要因は何か」：衰退要因としては、3Kを嫌う若者が増えたこと、若者の高学歴化が進んだことがあげられる。成長要因としては、所得水準の増加に伴って、消費先が多様化したことがあげられる。
5. 「GDP増加について、教育・研究における効果が大きいのはなぜか」：教育・研究は、主に人材や知識によるものが多いから。

3. 「アベノミクス」は今では日本では知らない人がいないくらい有名でありおそらく簡単であろう、という安易な考えから、テーマにすることはすぐに決まった。しかし実際、深く調べていくと本当に奥が深くわからないことだらけでゼミ大会はおろか、論文提出でさえ時間におわれ、厳しい現実が常に目の前にあった。本当にゼミ大会に参加できるのか、とさえ思った。しかしやはりそれを解決したのは班のみんなの団結力であった。みんなで役割をきめてそれぞれの仕事をし、互いに助け合いついに完成することができた。

最後に今回のゼミ大会を通して、もちろんテーマある「アベノミクス」の公共事業について知ることができた。それに加え、班のみんなとの助け合い、ひとりでは何もできないということを学び、これからの論文政策にも今回のゼミ大会で学んだことをいかしていこうと思った。

1. 報告の要旨

世界の武器の輸出量は、増加傾向にあり、アメリカ、ロシアが過半数を占めている。輸入国は、インド、中国、パキスタンなどとなっている。また、新興国への輸出へと向かっている。現地生産も検討されるなど、流れが変わりつつある。これまで、日本が武器輸出を行ってこなかったのは、武器輸出三原則によるものである。そのため、国際共同開発に参加できていない。しかし、2011年、野田政権（当時）が武器輸出三原則の緩和を表明し、その後、2012年にイギリス政府と、フランス政府と武器の共同開発で合意している。

武器の輸出を行うべき理由として次のような理由が挙げられる。①調達価格を抑える②生産ラインの維持③外交カード④技術開発による相互利用⑤産業育成である。

一方で世界は、武器の輸出規制に向かっている。武器貿易条約が採択され、規制の方向へ向かっている。

結論としては、規制の範囲内で、紛争を助長したり、技術が流出したりすることがないようにしたうえで武器の輸出を行うべきである。

2. 部会での討論内容

部会においては、事前に送られた質問に回答した。

質問；イージス艦は日本でも有数の高性能な兵器だと考えていますが、ブラックボックスがアメリカに握られているとは知りませんでした。

他に他国に中核を握られている兵器はありますか？

回答；他には見当たらなかった

質問；F-35が空自の時期主力戦闘機になるらしいですが、わが国での独自の戦闘機の開発はできないのでしょうか？

回答；技術的に可能だが、減少傾向にある防衛関係費の都合で難しい

質問；日本は結局、兵器・武器の輸出・生産を増やしていくべきなのでしょうか？

回答；調達価格を抑えるなどといった理由から行うべきである。

質問；より多くの兵器・武器を生産する能力をもつことで日本が軍事国家への道を歩み始めることはないのでしょうか？

回答；イギリスやスイスも武器生産能力も持っているが軍事国家ではないので、その道を歩み始めることはないと考える。

3. ゼミナール大会で学んだこと

ゼミナール大会においては、論文作成の難しさを感じた。論理を裏付けるための根拠を集めるのには、苦勞した。また、パワーポイントの作成においても、簡潔で分かりやすく、伝える難しさを感じた。論文やパワーポイントの作成方法など、今後も役立つ事を学ぶことができた。

1. 報告の要旨

これまで東アジアは、安い人件費と多くの労働人口を武器に、日本を代表とする先進国からの直接投資を呼び込み、在アジア現地法人の活動に伴うフラグメンテーション化を通じた労働集約性を獲得し、中間財輸出入が域内貿易の大半を、最終財輸出が域外貿易の大半を占める特性を持った「世界の工場」として発展してきた。今後の東アジアは、中間層所得や富裕層人口が他地域と比較して最も増加が著しいと見込まれ、最終財輸入が域外貿易に占める割合を拡大していくことが予想されており、域外に市場を求めるため域外の経済ショックに脆弱性を示してきた「世界の工場」から域内に巨大な市場を持つ「世界の市場」へと成長し、欧州債務危機の影響を受けて低迷する欧米先進諸国に代わって、世界経済の成長をリードしていくことが期待されている。

今後の日本は、以上の東アジアの変化の流れを踏まえた経済戦略として、東アジアの FTA を推進し、そのフィールドで経営展開していくことが、国内事情だけでなく国外事情も鑑みの上で必要とされている。

日本は 1990 年半ば以降、労働生産性上昇の停滞により経済低迷をしてきた。加えて少子高齢社会に伴う労働人口の減少を迎えており、日本の経済成長率上昇あるいは維持は困難さを増している。このような現状に対して、労働生産性上昇を実現することが早急の課題である。労働生産性を上昇させるには①国内企業に占める割合が高い低生産性部門の生産性底上げ、②高生産性部門の生産活動の範囲拡大、の二点が必要である。第一に、海外展開している企業ほど生産性が高いという調査報告があること、国内だけで展開している中堅・中小企業の多くは自らが持つ技術やサービスが東アジアにおいて十分通用すると考えているということ、日本食やクールジャパンに代表される日本文化の人気上昇が目覚ましいということから、低生産性部門の中堅・中小企業の「世界の市場」東アジアへの進出を後押しするため、東アジア域内での経営展開や貿易に関する手続きを簡素化できる FTA 推進が効果的である。第二に、既に海外進出などを行っている高生産性部門の活動をさらに活発化させるためにも、消費地として成長が見込まれる東アジアでの関税障壁の撤廃や著作権保護などのルール制定が望める FTA 推進が重要である。

中国の台頭により東アジアにおける貿易での日本の相対的プレゼンスは低下しており、東アジアの経済発展に多大な影響をもたらしてきた在アジア日系現地法人も他国の在アジア現地法人に売上シェアを奪われつつある。WTO 決議が加盟国の多さの故に遅々として進まず、世界各国で FTA が盛んに締結され、東アジアもその流れに乗っていること、メガ FTA を模索する動きを欧米諸国が見せていることから、ASEAN を中心に東アジア経済圏構築への動きが加速している。貿易面での相対的プレゼンス低下の抑制や在アジア日系現地法人の活動の範囲維持・拡大、東アジア経済圏構想実現に向けた動きで日本がインセンティブを獲得するために、東アジア各国地域との FTA、RCEP や TPP をはじめとするメガ FTA 締結に、各 FTA を慎重に審査検討しつつも積極的な姿勢を示していかなければならない。

2. 部会での討論内容

一つ目の「中間財貿易が域内貿易の大半を占めることが東アジアでのフラグメンテーションの深化を物語るとはどういうことか」という質問に対し、「東アジアで取引させる中間財とは部品・加工品のことを指し、特定の域内地域で特定の部品・加工品が生産され域内へ輸出されることから、域内地域で分業体制が敷かれていることがうかがえ、このことをフラグメンテーションと呼ぶ」という返答を行った。

二つ目の「今後東アジアが消費地として成長が見込まれているが、移り変わって次の消費地となるのはどの地域か。そのとき東アジアはどうなるのか」という質問に対しては、「インドやアフリカが東アジアの次の成長エンジンになることが予想されている。一方で、人口・資源の豊富なカンボジアやミャンマー、バン

グラディッシュもまた同時期に消費地として成長することが見込まれていることから、東アジアは長期的視点においても世界の経済成長を支える存在といえる。中国は近い将来少子高齢化を迎えると考えられるが、先駆者である日本は介護・医療サービスやロボットなどの需要獲得による経済成長を実現できる」という考えを述べた。

3. ゼミナール大会で学んだこと

論文作成に時間を取りすぎて、プレゼンの練習に十分時間を割り当てなかったため、報告内容が定められた時間内に収まらなかったこと、各ゼミに伝わらなかったことが反省点である。

討論するという事は、事前にお互いの論文の要点をしっかり把握し、お互いに批判し合いつつも最終的に歩み寄って、それぞれの論文のテーマに対する結論を出すことであると考えている。各ゼミが対立姿勢から同じ方向を向くためには、議長が存在が欠かせないと感じている。次回以降の討論部門に、お互いの論文の要点把握の義務付けと議長団の設立を提案したい。

私たちは現在の不景気、晩婚化、少子化の問題の解決策として恋愛を活発化させるという案を考えました。そして、恋愛にはどれだけの経済効果があるか、大学生は現在、どのくらい恋愛をしているのか現状を調べ発表しました。

今回の討論では、デートにかかる費用は男性の方が高いという結果をアンケートから導き出しました。しかし、「女性は男性より化粧等の身だしなみに費用をかけていると思うのですが？」という質問があり、デートの費用＝デートの時に二人で使うお金と考えていましたが、デートに行きつくまでの準備段階でかかる費用も考えてもいいのではないかという視点に気が付かされました。ほかにも自分たちの予測していない質問が多くあり、どこが質問で来るかを予測していたのですが、それを上回る量の質問が来て、即座に考えて答えるいい経験になりました。また、人により物事を考える視点が様々だと気が付けよかったです。

今回、私たちは「恋愛経済学」をテーマに論文を作成し、ゼミナール大会に臨みました。今回ゼミナール大会を通して学んだことは、主に三点です。相手に伝える難しさ、アンケートを取る難しさです、そしてグループで作業する難しさです。

相手に伝える難しさは自分の思っていることを伝えるには細かく、一つ一つ伝えないといけないということです。自分には調べる過程で多くの情報を手にしていますが相手は情報がないわけですから分かっている過程で話しても伝わるわけがありません。今回自分たちが好きなテーマを自分たちの切り口で追求していったわけですから楽しさや興味、理解度などは大きかったのですが、そこで理解したことを発表するのは難しかったです。

アンケートを取る難しさは今回、大学生の恋愛・結婚観を見るうえで松山大学生 300 名以上を対象にアンケートを取りました。多くの学生に対してとらなければならないので教授の方々にも協力してもらいました。しかし、空欄があるものや適当に答えているものも多くあり無効票になり大変でした。質問数も多かったので集計にも苦労しました。しかし、アンケートの数値を使ったことにより自分たちのデータと世間との比較もでき、よかったですと思います。また、自分たちがとった数値なので信憑性の高くなりますし、自分たちの研究と自覚できたのでよかったですと思います。

アンケートを集計後、もっと聞いておけばよかった質問等も出てきました。そこで、結果の予測を立てて質問内容を考えていくことが大切だと学びました。質問を考えた段階では完璧だと思っていたのですが、集計を取ってみると不足が多くあり未熟さに気づきました。

グループワークの難しさは、私たちは集まって作業をするというのをメインで作業を進めていったのですがみんなの集まれる時間を合わせるのや集まってからの作業の分担に苦労しました。もっと分担して作業を進めていけば効率よくできていたと思います。しかし、集まる回数を多くしたことにより各自がしっかり意見を主張でき、誰か一人に任せることや、一人の意見だけが主張されることがなくグループのみんなが不満なく納得のいく論文、発表になったと思います。

恋愛経済を調べるにつれて現在の若者の恋愛に対する意識と仮説を立てることが出来ました。現代の若者は恋愛に対しての意識は高いものの実際に実行できている人は少ない事がわかりました。そこで恋愛を商品と考えると負担は大きいのに付き合えるとは限らずハイリスク・ハイリターンだと考えました。現代の若者はリスクを避ける傾向にあり、そこが現代の若者が恋愛に手を出せないという仮説を立てることが出来ました。

今回のゼミナール大会により、協調性や相手に自分の意見を伝える力、分析力が身についたと思います。

【報告要旨】【質疑応答】

- facebook は、年配の人が多くて LINE は若い層に人気があるのか。
facebook の特徴として友達になるにはお互いが友達申請をする必要がある。そのため現在、親しい仲の人としか繋がらない。LINE は、登録をすると連絡先を知っていると勝手に友達になってしまう。このため年配の人の方が現在は全く繋がりのない人が多くこれを嫌うのが主な原因だと思う。
- 無料 SNS はどのように利益を得ているのか。
企業からの広告収入や課金のゲームや、スタンプから利益を得ている。
- mixi 利用者が減った理由は何か。
他 SNS との連携を機に使い勝手のいい方へユーザーが流れてしまった。
- ソーシャルネットワーキング理論とは。
「6 次の隔たり理論」などがあり、人は自分の知り合いを 6 人以上介すと世界中の人々と間接的な知り合いになることが出来るという仮説である。
- 中国の SNS は今後どうなると考えるか。
中国について調べられてなかったので答えられませんでした。
- SNS を利用していく上で、どのような対策をすべきか。
画像データに含まれる情報は、見られないように設定する。知らない人との交流には十分注意する。

【学んだこと】

今回のゼミナール大会において、私たちのグループは準備の点で反省点が多くあった。下調べを目次ごとに分担をすることで、グループ内で平等に取り組めたとは思いますが、論文におこしてみると各項目が独立し、提起から結論にうまくつなげることができなかった。さらに、論文の提出期限までにその点について十分に話し合うことができず、話題が散漫してしまい、内容の薄い論文となってしまった。後半急ぎ足となってしまったが、集合の際は、その日の完了ポイントと次回課題を明確に設け、取り組むことができたと感じる。また、他の班の論文を見て感じたことだが、章立てをすることで、内容がまとまり、ポイントがつかみやすかったと思う。先生からのアドバイスでは言葉の言い換えに注意するよう言われ、ニュアンスの難しさを感じた。

当日のプレゼンテーションでは、論文内容のズレは解消できたと思う。しかし、制限時間の半分ほどの時間で終わってしまった。スライドの作り方に関しては、箇条書き状態のものが多く、レジュメを見ただけでは、内容が理解しづらかたのではないかと思う。後々、どんな内容であったか見直しができるスライドに改善すべきだった。他班の発表は、グラフなどのデータが多用されており、見応えのあるプレゼンテーションだと感じた。質疑応答においては、内容が絞られていたこともあり、ある程度質問が予測でき、的確な応答ができたのではないかと思う。担当者以外が答えられなかったのは事前の内容の共有ができていなかったという反省すべき点だった。部会には、他グループの発表を最前列で聞くことができ、恋愛を経済学の観点で分析したという、興味深い内容や、東アジアの経済状況について勉強でき、とても有意義な時間が過ごせた。